

Offprint from:

『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』  
平成15年度（第7号）2004年3月発行

---

---

*Annual Report of  
The International Research Institute  
for Advanced Buddhology  
at Soka University  
for the Academic Year 2003  
[= ARIBAB], vol. VII, March 2004*

---

---

工藤順之

「Karmavibhaṅga 第61節の付加部分の検討 — 正量部所属説有力資料とされる一節」

Noriyuki KUDO

On the Interpolation of *Karmavibhaṅga* § 61  
— As Positive evidence of the school affiliation of the KV

The International Research Institute for Advanced Buddhology  
Soka University  
Tokyo · 2004 · Hachioji  
JAPAN

創価大学・国際仏教学高等研究所  
東京・2004・八王子

## Karmavibhaṅga 第61節における付加部分の検討 — 正量部所属説有力資料とされる一節 —

工藤 順之

### 0. はじめに

本稿では、『(マハー・)カルマ・ヴィバング』([Mahā-]Karmavibhaṅga)第61節を取り上げる<sup>1</sup>。この節では他の不善業道によってもたらされる結果を説く節と同様に (§ 51 が総説、§ 52-61 が各論となっている)、邪見という業道によって外的世界に現れる結果、即ち「外法の悪化」を説くが、節の途中で一旦は十不善業道全体に関するまとめの文があるにも拘わらず、更に長文を以て外界に現れる食物の悪化を語る部分を持っている。この部分だけを取り上げるのは、一つにはそれが他の節で語られているものとは明らかに異なる説示内容になっていて(邪見業道による外法の悪化の内容はこの部分の直前に二種類の結果が既に説かれていて、その説示の仕方は他の業道の場合と同じである)、その異質な在り方はおそらくこのテキストの形成過程の或る段階を反映しているものではないかと思われるからである。第二には、その部分に現行の校訂テキストが図らずも有することになってしまった写本読解上の問題点が含まれているからであり、第三に未だ確定したとは言い難いこのテキストの所属部派を決定する重要な手がかりとなると指摘されているからである。元写本を再読する過程で明らかになった幾つかの新たな問題点と共に、テキストがいかにして発展・展開してきたのかを、第61節という全80節の中の一つの節を取り上げ検討したい。以下は、校訂テキストが出版されて以降、決して多くはないこのテキストそのものを研究対象とした研究者のうち、最も多くの成果を発表し、引用文献の対応関係から KV 正量部所属説を提言した並川孝儀博士と、本稿で問題とする部分が別の正量部文献と完全にパラレルになっていることを見出し、並川博士によ

<sup>1</sup> 本稿ではこれまで用いてきたこの文献のタイトルを『マハー・カルマ・ヴィバング』(= MKV) から『カルマ・ヴィバング』(= KV) に統一することにする。その理由は第一に、Mahākarmavibhaṅga という名前が写本Aのみに残るもので、それもこれまで MKV と読んでいたテキストとその注釈書とされる、Lévi 命名の『カルマ・ヴィバング・ウパデーシャ』(Karmavibhaṅga-upadeśa = KVU)のテキストの二つを筆写した写本の一番最後、即ち KVU の終わった後の奥書部分に見られる名前であるからである。MKV と呼ぶテキストの筆写された最後には奥書はなく、テキストの終わりに続いて KVU の帰敬偈が始まる。つまり、単独のテキストの名前ではないのである。第二に、写本Bは MKV だけを有する写本であるが、その最後には Karmavibhaṅgasūtra とある。このテキストは内容的には「スートラ」と見えずには無理があるが、初期段階から拡大・展開してきたというテキストの性格を考えるならば、引き続き「スートラ」と呼ばれていた(呼んでいた)ことも不思議ではない。両写本での呼称を考慮すると、Karmavibhaṅga とするのが適正であろう。チベット訳にも、冒頭に「インド語でカルマ・ヴィバング」とあることも、理由の一つである。

る正量部所属説を補強した岡野潔博士の研究に多くを負っている。両博士による様々な論考を前提として KV に内在する多くの問題点を KV 自体のテキスト形成過程から見直してみる試みが本稿である。尚、以下では敬称等を省略させていただくことを予めお断りしておきたい。

## 1. KV §§ 51-61 を中心としたテキスト構成の問題

KV §§ 51-61 は十不善業道によってもたらされる結果について述べている。それらの個々の内容については別稿で検討したのでここでは触れないが<sup>2</sup>、§§ 51-61 という不善業道を扱った一つのグループを形成する諸節が前後諸節と比較してどのような位置づけにあるのか、その点を業報説示の仕方から眺めておこう。

### 1.1 業報項目各論の記述の違い

KV が業によってもたらされる果報を列挙し、多くの他文献を引用あるいは言及している文献であることはよく知られている。その業報列挙の仕方については、テキスト自体の形成過程と同様にこれまで特に考察されてきたとは言えないが、次のようにまとめることが出来る：

- §§ 1-14 では七種の事例についてそれぞれ優劣が区別された果報（長寿・短寿、多病・無病、端正・不端正、権勢・無権勢、有財・無財、貴族・卑俗、有智・無智）をもたらす業について説く。これらは「鸚鵡経類」に属する全てのヴァージョンに共通している<sup>3</sup>；
- §§ 15-22 では地獄に始まる六道と欲・色・無色界の三界に生まれる業を説く、つまり現世における業が何処で異熟するのかをまとめたものである；
- §§ 23-26 では為される／為されないと積集／無積集の四句分別によって業を四種に分類する；
- §§ 27-29 では地獄に生まれた者が地獄での寿命を全うするか否かによって区別される業を説き、30-31では生まれを選べる／選べない業を述べる（その具体的な内容は全く不明である）；
- § 32 は他所で報いを受ける業について、このテキストでは一つの文献から引用・言及されるものとしては最長になる因縁譚を持ち、それ以外にも相当数の他文献の言及や引用を含んでいる。その結果、節としては最長になっている。内容的には、許可無く他所へ出掛けることが、両親の許可を得ない事例から和尚・阿闍梨の許可を得ないことへと展開され、最後は世尊への帰依、そして世尊亡き後では阿闍梨・和尚を尊重することについて説いて終わる；
- §§ 33-36 ではある業を為した者が人生の前半／後半に幸／不幸となるという四句分別によって、どのような業を為したためにそうなったのかが説かれる；
- §§ 37-39 ではある業を為した者が貧／富にして喜捨を好む／好まないという組み合わせによって、どのような業を為していたのかを示すが、Skt. には「貧乏・慳貪」の項目がなく、ここでは四句分別になっていない。しかし対応する二つの漢訳にはそれがある<sup>4</sup>；
- §§ 40-43 では業と寿命が尽きるか尽きないかを説くが、そこに煩惱と功德が紛れ込んで組み合わせられており、それぞれのヴァージョンによって中身が一致しない。内容的には既に説か

<sup>2</sup> 拙稿「十不善業道による世界の成長・損壊—『カルマ・ヴィバング』所説の十不善業道の果報を巡って」『佛教学総合研究所紀要別冊・佛教と自然』2004.3発行予定。

<sup>3</sup> 共通しているのは七種についての優・劣、即ち十四の業報を説くという点であって、その具体的な中身は必ずしも一致しているわけではない。単純に幾つかの業を説く文献もあれば、項目を十に集約し、テキストの構成をより洗練したものもある。

れた業報について、尽きるか尽きないかを説いただけにすぎない；

§§ 44-47 は心／身と苦／楽を四句分別によって、そのような境遇をもたらす業が何であるのかを説く；

§§ 48-50 では不幸な境遇に生まれた者の容姿についてその違いをもたらす業を説く；

§§ 51-61 では所謂「十不善業道」によってその当人にもたらされる果報と外界に現れる結果とが併記して述べられる；

§§ 62-76 は仏塔崇拝に関連する、或いはサンガに対する供養によって得られる功德を少しずつ挙げていく；

§§ 77-79では出家・林住・喜捨の生活による功德、80では十種の自信を説く。

以上が KV 諸節の簡単なシノプシスであるが、或る果報についてそれをもたらす幾つかの業について説く場合(§§ 1-22, 33-39)、単なる業の説明をするだけの場合(§§ 23-32, 40-47)、或る業についてそれによってもたらされる幾つかの果報を説く場合(§§ 48-79)が混在していて、業とその結果を説くということに関して全体として統一がとれていない(或いは整備されていない)。このような一貫性を欠く記述の仕方はそれ自体、この文献が徐々に増広されてきたことを如実に物語っている。また、扱われる業と果報に対しても、前半部分が世俗的生活における倫理的観点から業報が説かれるのに対して、§ 62 以降は仏塔崇拝を明らかに意識しており<sup>4</sup>、業の果報として列挙される内容の最後には共通して「天界に生まれる。そして速やかに涅槃に至る」(svargeṣūpapadyate. kṣiprañ ca parinivāti) ことが含まれていて、出家・在家の

<sup>4</sup> Ch-5 [894a12-15]; Ch-6 [898b5-11]. Lévi は“Tableau Comparatif”においてその点を指摘している[Lévi p. 16: XXXVIIIbis pauvre et avare [seulement dans la table de A; le § correspondant manque]]. 尚、同表に示されている限りでのチベット訳にはこの「貧乏・慳貪」という組み合わせの業報はない。

<sup>5</sup> KV 前半で業報を説明する部分に見出される仏塔に関係する記述は以下の通りである。Skt. と同様に仏塔に関わる記述を持つ対応漢訳がある場合はそれも掲げるが、そのような記述も持たない漢訳は挙げない。

§ 2. tathā stupa(< stūpa)c[ai]t[ya]viharāṇāṃ [vi]sīrṇānā(ṃ) pratisa(ṃ)skāraṇāṃ (Lévi 34.4-5; A12v.2-3; B7v.4-5)「壊れた塔・廟・精舎の再建である」

Ch-6 [896c24-28]: 十幡燈供養。

§ 5 stūpāṅganacetra(< caitya)grhavihārāṇāṃ ca bhūme(r) viśodhanaṃ | stūpānā(ṃ) pratimānāṃ ca dīpavyucchedaḥ | (Lévi 38.1-3; A15v.3-4; Bx)「塔の中庭・廟・堂舎・精舎の地面を掃除しないこと。塔や(仏)像への燈明を消すこと。」

Ch-5 [892a28-b5]: 八者於佛塔廟斷滅燈明。

Ch-6 [897a8-12]: 七盜佛光明。九壞佛光明。

§ 6 vastrapradānaṃ | stūpacetyagrheṣu ca sudhādānaṃ | suvarṇap(ā)tradānaṃ | gandhalepapradānaṃ | alaṃkārapradānaṃ | ... stūpāṅganavihārāṇā(ṃ) sa(ṃ)mārjjanāṃ <|> satataṃ grhasarīmārjjanāṃ (Lévi 38.6-9; A16r.1-3; Bx)「... 塔・廟・堂舎を塗ること。黄金の鉢を布施すること。香・軟膏を布施すること。裝飾品を布施すること。... 塔の中庭・精舎を掃除すること。常に堂舎を清掃すること。」

Ch-5 [892b5-10]: 五者塗飾佛塔。六者掃灑堂宇。七者掃灑僧地。八者掃灑佛塔。

Ch-6 [897a12-17]: 二惠施佛塔。三塗掃塔寺。四修嚴精舎。五莊嚴佛像。

§ 8 Bhagavataś caityastūpakārāṇāṃ (39.9-10; A17r.2; Bx)「世尊の塔廟を建立させること」

Ch-5 [892b19-26]: 六者發菩提心。造佛形像。奉施寶蓋。

§ 10 Skt. x

Ch-6 ¶-8[897a21-26]: 五施佛傘蓋。六修嚴塔寺。

以上のように、仏塔が絡む内容を記述しているのは「鸚鵡經類・第二類」に属する漢訳のみで、「第一類」に属する文献には一切出てこない。尚、チベット訳に関しては内容的に Skt. に準じたものになっているのでここには挙げない。

区別なく、より宗教性の強い、救済を意識させる内容を説く<sup>6</sup>。

さて、十不善業道を扱う §§ 51-61 はその中間にあるのだが、それらもまた先行する諸節とは些か異質な要素を持っている。それは、先行或いは後続する節では業を為した人にその果報がもたらされるという形で極めて個人的なレベルで業報思想（即ち自業自得という発想）を説くのに対して、自らを取り巻く外界世界もそのような思想に支配されているという内容を表明している点である。外界に業が影響するという記述は KV の他の箇所には説かれておらず、KV が初期段階の「鸚鵡経」から徐々に発展してきた或る段階の姿を体現しているテキストであることを考えると、こうした説示の仕方や説示内容の指向性の違いは間違いなくこのテキストの形成過程で生じた断層のようなものを反映していると言える。

## 1.2 § 61 までと § 62 以降

更に、§ 62 以降の節が或る程度の時期において § 61 の後に付加されたことが「鸚鵡経類」諸訳の *uddeśa* の記述からも確認出来る。業報を説くに当たって、「鸚鵡経類」の多くのヴァージョンは冒頭に因縁譚を持ち、次いで世尊がこれから説こうとする業報を列挙する *uddeśa* 部分があって、各論に入っていく。諸資料のテキスト構成を一覧すると以下の通りになる：

	Skt.	Pāli	Ch-1	Ch-2	Ch-3	Ch-4	Ch-5	Ch-6	Tib1	Tib2	Tib3
因縁譚	○	×	○	○	○	×	×	○	×	×	○
<i>uddeśa</i>											
項目-14	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
項目-50	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○
項目-61	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○
項目-80	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×

Pāli: MN No. 135: *Cūḷakammavibhaṅga-sutta* (III, pp. 202-206).

Ch-1: 『佛説兜調經』失訳 [265-316CE.], T 78, 1, 887b5-888b11.

Ch-2: 『中阿含』「鸚鵡經」僧伽提婆 [397-398 CE.], T 26(170), 1, 703c-706b11.

Ch-3: 『佛説鸚鵡經』求那跋摩 [435-443 CE.], T 79, 1, 888b16-891a13.

Ch-4: 『佛説淨意優婆塞所問經』施護 [982-1017 CE.], T 755, 17, 588c9-590b7.

Ch-5: 『佛爲首迦長者説業報差別經』瞿曇法智 [582 CE.], T 80, 1, 891a18-895b21 [= Lévi: Chg].

Ch-6: 『分別善惡報應經』天息災 [982-1000 CE.], T 81, 1, 895b26-901b19 [= Lévi: Cht].

Tib1: Las rnam par 'byed pa. [D, N, Q, H]<sup>7</sup>

Tib2: Las kyi rnam par gyur ba ... [D, N, Q, L, S, H]

Tib3: Las rnam par 'byed ba. [F, F2, L, S, N, H]<sup>8</sup>

上記資料の内、Pāli と漢訳 4 本(Ch-1, 2, 3, 4)は所謂「鸚鵡経類」第一類<sup>9</sup>に属し、業報 14 項目のみを有する初期段階の文献であり、§ 15 以降の節を持たない。従って、*uddeśa* を持つと言っても、KV の後半部分のテキストを考察対象にする本稿では問題にしない。他方、より拡大した姿を持つ「鸚鵡経類」第二類を見ると、

<sup>6</sup> 並川 1984c: 38, 40 参照。

<sup>7</sup> チベット諸本の対応と略号については Appendix を参照のこと。

uddeśa に § 61 までの項目を記載するものは uddeśa そのものを欠く Tib1 以外の全てであるが、§ 62 以降の節見出しを記載するものは僅かに梵本と Ch-5 だけである。しかし、実際の各論部分では Ch-6 も Tib1-3 も § 62 以降の節を有している。Ch-5, 6 と Tib-2-3 の uddeśa 部分の末尾を引用しよう：

Ch-5 [891a25-26]:

或有衆生。習行十不善業。得外惡報。或有衆生。習行十種善業。得外勝報  
復次長者。若有衆生。禮佛塔廟。得十種功德。

Ch-6 [896b29-c19]

爾時佛告長者言。「汝應善聽。一切有情造種種業起種種惑。衆生業有黑白。果報乃分善惡。黒

<sup>8</sup> Lévi 出版時点では KV 対応のチベット訳には二種類があるとされてきた、即ちここで用いている略号でいう Tib1 と Tib2 である。しかし、1970年発表の W. Simon の論文によって第3のチベット訳（本稿で用いている Tib3）の存在が判明した。その後、並川 1984c は Simon の指摘に従って、第3のチベット訳として大英博物館所蔵の写本カンギュル (Or. 6724) を取り上げ、系統の違いを指摘しているが、その検討は Simon 1970 に指摘された範囲内に留められている。（並川 1984c の註2にその点が述べられている。）尚、この註には大英博物館所蔵のチベットカンギュルの中に Simon が用いたテキスト以外にもう一本のチベット訳があると紹介されている。Barnett のカタログから得られた情報に基づくものであるが、このチベットコレクションは後に Grinstead によって再調査が行われている。如何なる理由からか Barnett のカタログではテキストの葉数番号が誤っている（144-151 とあるが、正しくは Grinstead の記載する 136-141）。現在、この写本カンギュルは「ロンドン（シェル・カルゾン）写本カンギュル」 (= L) と呼称されており、またマイクロ・フィッシュにて刊行されている。Simon が用いたチベット訳は No. 202 であり、他方は No. 213 と分類整理されている。後者は確かに Q1006 = D 339 と同系であり、Tib2 に分類される。

これまでまとめられていた KV のチベット訳の分類にはまだ混乱がある。例えば、ラサ版 (= H) では「高崎目録」によって No. 343 と 345 があり、前者は D338 = Q1005 = N 323 と同系、後者は D339 = Q1006 = N 324 と同系とされていた。しかし、ラサ版には更に No. 344 という KV に対応するテキストがあり、内容を見ていくと、この H344 が D338 = Q1005 = N 323 と同系で、D343 は Tib3 に分類されるべきである。

またナルタン版 (= N) でも分類の食い違いが生じている。ラサ版の「高崎目録」では N784 とあるものが「長嶋目録」では No. 783 とあり、それを用いた河口慧海コレクションカタログの「齋藤目録」でも No. 783 とあり、D338 = Q1005 = N 323 と同系であるとされていた。しかしこれは明かな間違いであって、この N784 は正しくは Tib3 に分類されるべきものである。この点を正しく記載しているのはラサ版の新しいカタログだけである。

系統分類としてはもう一点、指摘しておく。ニューアークにある写本カンギュルについては先に P. Skilling によって予備報告がなされ、その全体を見渡せるようになった。その中の「Mdo bsde tsha // 20.472」の 186a9- には “Las rnams ’b[ya]ed pa’i mdo dang” があり、これも『カルマヴィバング』のチベット訳である。その分類については Dietz によってトク・パレス (= S)、ロンドン写本カンギュル (= L) と同系であると確認されている。

また Dietz はブタック写本カンギュルにある二本のチベット訳が両方ともトク・パレス、ロンドンのチベット訳と同系であることを指摘している（ブタックのカタログでは間違っって別々に配当されている。即ち、F186 が D338 = Q1005 = N 323 に、F404 が D339 = Q1006 = N 324 と同系であるとされていた）。この点は公表されたものとしては彼女の指摘が今のところ唯一であり、本稿筆者が『カルマ・ヴィバング』チベット訳のみの調査を別途行っていた過程で確認したことと一致する。

<sup>9</sup> 山田 1935: 340 に類似経典を総称して「鸚鵡經一類」との表現があり、また論文末にはそれに含まれる文献を一覧している (ibid., 348-49)。中央アジアに散在した断片的な資料を除く、梵蔵巴漢のヴァージョンをテキストの構成から「第一類・第二類」という形で再分類したのは並川の功績である (1984c)。その再分類は極めて周到に為されていて、原則的には修正の要はなく、本稿でもそれを用いている（第二類内部での展開或いは相関関係については Tib3 や MS[B] 附随の二枚の写本、即ち MS[C] の存在によって若干の見直しが必要であろう。MS[C] については Fukita 1990 参照）。

業三塗受報。白業定感人天。又業有分限命乃短長。(中略)或復有業補特伽羅。諸根具足不具足等」

爾時佛告長者子言。「有十善業應當修習。若十惡業汝應除斷。」

Tib-2: uddeśa<sup>10</sup> [D600.1; H493a4-5; L138b4; N466b1-2; Q312a5; S300.3-4]:

ma na ba yang 'di lta ste l mi dge ba bcu'i las kyi lam byas pa'i rgyus l1 phyi rol gyi yul sa'i don2 du 'gyur ba yang3 yod do4 l

1. H, N omit. 2. H, Q add: *ngan*. 3. H, S: 'nga. 4. H omits: *do*.

Tib-3: uddeśa<sup>11</sup> [L305b8-306a2; F162b7-163a1; F2.337b4-5; S728.3-4; N135b7-136a2; H432b3-5]:

bram ze'i khye'u mi dge (H432b4) ba'i las kyi lam1 bcu po (L306a1) dag2 l3 yang (F162b8) dag par blangs (N136a1) pa'i rgyus4 (F2.337b5) phyr5 rol gyi dngos po bcu rgud6 par7 snang l

dge ba bcu'i las kyi lam rnams8 yang dag par (S728.4) blangs pa'i rgyus 19 (H432b5) phyi rol gyi dngos (L306a2) po bcu (N136a2) phun sum10 tsogs par (F163a1) snang ste11 l 'di ni mdor bstan pa'o l l

1. F omits: *kyi lam*. 2. F2 omits. 3. F, F2, H, N, S omit. 4. F, F2, H, N add: l 5. F, S: *phyi*. 6. F2: *dgud*. 7. F omits: *rgud par*. 8. F2 omits. 9. F, S omit. 10. F2: *gsun*. 11. F: *te*; F2: *ba ste*.

これを見れば明白であるが、Ch-6 の uddeśa に相当する部分では一旦世尊の言葉が終わり、続いて「爾時佛告長者子言。『有十善業應當修習。．．．』」という新たな発言があって十(不)善を挙げ、その後に再び次なる会話部分、即ち「於是長者白佛言。『世尊。有情短命何業所獲。．．．』」として各論が始まっていく。つまり、この「十善・十悪業」についての一文は、世尊の台詞が終わり各論に入っていくその間にある別の台詞であって、その中身も実際の各論部分の当該節で説かれている「外法の悪化」に関しては全く触れていないのである。uddeśa 部分に全ての業報項目を列挙する Ch-5 も十不善業道を挙げた後で一旦は世尊の台詞に区切りを付けている。

Walter Simon の指摘にあるように、ロンドン写本カンギュルもこれと全く同様になっている。即ち、Tib-3 の uddeśa は十不善・十善業道の見出しを挙げた後、各論では扱われている仏塔崇拜等の功德に関する業報項目が列挙されずに uddeśa が終わり、そして各論に入るのである。また Tib-2 も新たな台詞の導入によって十不善を挙げるものの § 62 以降の項目を列挙していない。

KV と Ch-5 のみが § 62 以降の項目を uddeśa に含めている一方、Ch-6 と Tib-3 は uddeśa には挙げていないが (Tib1 は uddeśa そのものがないのであるが) 各論としては § 62 以降も全てのテキストで論じられていること、そして Tib-2 と Ch-6 では十不善業道を説くことを唐突な会話文を以て述べることに、Ch-5 では十不善業道を挙げてから一旦は区切りを付けること、こうした文脈の乱れがあるということと uddeśa の見出しと各論での項目が食い違うという事実は、先ず § 51 以降の後半部分が後から追加されたが uddeśa 部分ではそのことの辻褃合わせが十分に為されなかったために生じた齟齬を反映し、§ 62 以降の項目を含んでいないのは §§ 51-61 が付加された後で更に加えられた為であると説明できる。Simon はこれについて次のよう

<sup>10</sup> uddeśa そのものは D598.2-600.1; H491b5-493a5; L137b2-138b4; N465a5-466b2; Q311a6-312a5; S297.7-300.4 にある。

<sup>11</sup> uddeśa そのものは該当頁は以下の通り: L304b3-306a2; F161b5-163a1; F2.336b1-337b6; S725.1-728.4; N134a7-136a2; H431a1-432b5. 尚、F はおよそ一行と三分の一にあたる文章が欠けている。その為 uddeśa は第3節の項目から始まる。

に理解している：「これらの見出し（即ち、§ 62以降。引用者注）が項目リストには挙げられていないという事実は明らかにそれらが後代の挿入であることを意味しており、従って「因縁談」と「項目リスト」は現行のものよりも原初的なサンスクリット本を体現しているに違いない。」<sup>12</sup>

従って、テキスト形成過程を考えると、少なくとも十不善・十善業道に関係する業報項目が追加された後で、仏塔等への寄進・布施による功德を説く後半部分が更に追加されたと考えてよいだろう。

## 2. § 61 の教説内容の検討

さて、KV § 61 では他の不善業道と同様に外法の悪化を説いた後で、十不善業道によってもたらされる果報全体をまとめる文がありながら、更に長文を要して胡麻・砂糖黍・乳の三種についてそれらの抽出したものが失われていくという内容を語っている。これは Tib1 も同様である。他方、漢訳と Tib-2, 3 では邪見による外法の悪化を説いた後に十不善業道による業報の説示全体をまとめる一文があり、KV に見られるような食物についての部分は存在しない<sup>13</sup>。

KV に見られる、胡麻・砂糖黍・乳を取り上げた部分は KV と Tib-1 のみに存在していて、十不善業道によってもたらされる結果を述べる諸節を加えた後で更に追加されたものである可能性が高い。そして、この特異な記述は岡野 (2002a<sup>14</sup>) によって正量部特有の世界観を反映したものであることが指摘され、並川 (1984a, 1984c, 1985b<sup>15</sup>) が提出した KV 正量部所属説を別の観点から補強する部分なのである。では、その部分を見ていこう。

### 2.1. 邪見業道→「外法の悪化」

先ず、十不善業道の第十番目の邪見業道によってもたらされる結果から見ておこう。外的世界に現れる悪化は「苦くて鹹いものが生じる」ことであり、邪見業の結果として人々は、いわば個人レベルに現れる結果として、様々な邪見、即ち虚無論者、斷滅論者、ローカーヤタ派に親近するとされる。以下、KV 当該節のテキストを挙げるが、斜体になっている箇所が十不善業道全体のまとめとなる部分、太字に

<sup>12</sup> Simon 1970: 162. "...the fact that their headings (= § 62ff. noted by N.K.) have not been listed in this table of contents clearly shows that they constitute a later addition to the Sūtra and that therefore both the introductory tale and the table of contents must represent an earlier Sk. text than the one which has survived."

<sup>13</sup> Tib1, 3 に共通するが、両者とも十善業道による結果を述べる節と更に一部の業道についての更に記述を含んでいる。これらはチベット訳以外にはなく、明らかにチベットでの伝承の中で加えられたものと判断できる。

<sup>14</sup> 論文の形で公開されたのは2002年であるが、その基は既に2000年9月7日の日本印度学仏教学会第51回大会で配布資料と共に口頭発表されている。

<sup>15</sup> 並川 1984a では化地部と説一切有部系の所属を明確に否定し、不確定要素は残るものの大衆部系も否定し、「飲光部、正量部等を想定し得る可能性も無視できない」(p. 74)とする。1984c ではより明確に正量部系と位置づける。1985b では「犢子部・正量部系」としている。



なっているのが本稿で特に問題にする食物の悪化を説く部分である。(KV §§ 51-61 全体のテキストと和訳は別稿に掲載した。またテキストの元となる二つの写本のローマ字転写も本稿掲載誌と同時期に別途出版予定である<sup>16</sup>。しかし、以下の検討に際しての利便性を確保する為に重複の誹りを恐れずに掲げることにする。但し、ここでは明らかな誤写や個々の写本特有の書き癖などは一切省略し、また二写本の伝承関係に関係すると思われる箇所のみ注記し、当該箇所の他バージョンと校合した形で提示する。チベット訳に関しては Tib1, 2 を Lévi の用いたナルタン版から、Tib3 を Simon の調査したロンドン写本カンギユルより転写した。他の版・写本との異読については本稿末に対応表とともに掲載している。残念ながら資料が不十分なので厳密な校訂を経たものではない。)

§ 61. Lévi 79.19-80.13; A50v.5-51v.1; B29v.2-30r.1.

mithyādr̥ṣṭer akuśa(B29v.3)lasya karmapathasya vipākena tiktakaṭukā bhavanti | picumarddakośātakiviṣatiktalābuprabhūti(A51r.1)ni phalāni prādurbhavanti | tasyaiva ca karmaṇo vipākato [B: mithyādr̥ṣṭer akuśalasya karmapathasya vipākena] nā(B29v.4)stikyavādī bhavaty ucchedadr̥ṣṭih | lokāyatanādiṣu ca śāstreṣu prasādo bhavati |

yathā Padā(A51r.2)śvasya rājaputrasya yaḥ Kumārakāśyapena Śvetavikāyāṃ vinito lokāyati(B29v.5)kaḥ |

yathā yathā satvā imān\* daśākuśalān\* ka(A51r.3)rmāpāthān atīva bhāvayanti | tathā tathā eṣā(m) daśānām bāhyānām bhāvānām atīva prādurbhāvo bhavati |

anenaiḥ kāraṇena Abhidharme [B: Mahāsamva(B29v.6) + + +] uktaḥ | bhaviṣyati (A51r.4) samayo 'nāgate (')dhvani yat tilā bhaviṣyanti | tilapiṣṭam na<sup>17</sup> bhaviṣyati | tailam na bhaviṣyati | ikṣu(r) bhaviṣyati | ikṣuraso na bhaviṣyati (A51r.5) | guḍo na bhaviṣyati | na khaṇḍam bhaviṣyati | na ca sa(B30r.1)rkarā bhaviṣyanti | gāvo bhaviṣyanti | kṣīram bhaviṣyati | dadhiṃ bhaviṣyati | navanītam na bhaviṣyati |<sup>18</sup> na ghr̥tam na ghr̥tamaṇḍo bhaviṣyati | evam anupūrveṇa sarveṇa sarve rasā<sup>19</sup> a(A51v.1)ntarddhāsyanti || ◎ ||

Ch-5, 894b25-27: 十者以邪見業故。感生外報。苗稼不實。收穫渺少。

以是十業。得外惡報

Ch-6, 899b1-2: 愚癡所獲外色不潔果實虛耗。

十不善業因之所得

Tib-1, Lévi-LXI: (D583.6) log par lta ba mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas | 'bras bu med pa (H480a2) dang chung ba dang (Q303b5) dug dang rku ba la sogs pa 'byung bar 'gyuro || las de nyid kyi rnam (N455b4) par smin pas | med par smra pa dang chad par lta zhing 'jig rten rgyad pan pa'i (H480a3) gtsug lag la sogs pa (D583.7) la dad par 'gyuro ||

mi dge (Q303b6) ba'i las kyi lam 'di bcu ji ltar bsgoms pa de lta de (N455b5) ltar rab tu 'phel bar 'gyur te | de'i phyir rnam par (H480a4) 'jig pa'i tshe | til yod kyang til mar mi 'byung bu ram shing yod kyang bu ram mi 'byung | bu ram (Q303b7) yod kyang hwags dang khar (D584.1) mi 'byung | ba yod kyang 'o ma mi 'byung | (H480a5) 'o ma yod kyang mar mi 'byung |

<sup>16</sup> Noriyuki KUDO, *The Karmavibhaṅga: Transliterations and Annotations of the Original Sanskrit Manuscripts from Nepal*, (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VII), IRIAB, 2004.

<sup>17</sup> 写本Bはnaを欠く。

<sup>18</sup> 写本Aには“gāvo bhaviṣyanti | kṣīram bhaviṣyati | dadhiṃ bhaviṣyati | navanītam na bhaviṣyati”という文章がない。

<sup>19</sup> ここで言われている rasa という語に関しては岡野 2002a: 222-7 を参照の事。彼に依れば正量部は rasa の意味を単なる「美味」として取ったのではなく sāra 「精髓」の意味で解釈していたとされる。KV が「胡麻はあるが胡麻油はない」・「砂糖黍はあるがその汁はない」という表現を持っていることは、KV もまた rasa を「精髓」の意味で取っていたことの証左であるとしている。またこの rasa という語については 2003年の印度学仏教学会でも発表されている。

*de ltar mi dge ba bcu'i las kyi rnam par smin pas | phyi rol gyi dngos po rnams rgud par 'gyuro ||*

**Tib-2, Lévi-LXII:** (D612.4) *log par ltas pa dang | byed du bcug pa'i* (L146b4) *las kyi rgyus ni sa bon* (N475b2) *dang 'bras bu chung zhing ngan par* (S319.1) *'ong ngo ||*

*'di ltar mi dge ba bcu'i las byas* (H503b2) *pas phyi rol gyi yul sa rnams ngan par 'gyur zhing* (Q318b4) *mi bde ba'i gnas skye bar 'gyuro ||*

**Tib-3, 061:** *log par lta bar* (H444b6; N147a6) *yang dag par blangs* (F2.147b8) *pa'i rgyus ni | 'bras bu med pa dang | nyung ba'i sa bon 'byung bar* (F174a1) *'gyur te |*

*mi dge ba bcu'i las* (L316a1) *kyi lam 'di dag yang dag* (S750.1) *par blangs pa'i rgyus |* (H444b7) *phyi* (N147a7) *rol gyi dngos po bcu rgud par snang ngo ||*

邪見業道によってもたらされる結果は二種類ある。まず、「邪見業道の結果として」(mithyādṛṣṭer akuśakasya karmapathasya vipākena)の「苦くて鹹いものが生じること」、もう一つは「その行為の結果として」(tasyaiva karmaṇo vipākena)「虚無論者・断滅論者・ローカーヤタ等の思想がはやること」である。

前者の内容を取り上げよう。別稿で検討したが、ここで述べられる結果は有部系資料と比較すると邪見業道ではなく九番目の瞋恚業道に配当されている内容である。そして有部系では邪見業道の結果として挙げられているのは KV の瞋恚業道に述べられているもの（「実が成らず、収穫とならない」）と一致する。つまり、不善業道の結果としては有部系と KV とでは第九と第十とが全く正反対になっているのである。

瞋恚業道 (KV §60).

玄奘訳『婆沙論』「一切外物多分枯悴果實苦澀。」(T 1545, 27, 588a26).

玄奘訳『俱舍論』「瞋故果辣。」(T 1558, 29, 90c13-14).<sup>20</sup>

AKBh. vyāpādena kaṭukaphalāḥ: 「瞋によって実は苦くなる」(254, 10).

Abhidharma-dīpa. vyāpādena kaṭukarmaphalāḥ (177.18).

邪見業道 (KV §61).

玄奘訳『婆沙論』「一切外物多分零落。乏少花果或全無果。」(T 1545, 27, 588a27).

玄奘訳『俱舍論』「由邪見故果少或無。」(T 1558, 29, 90c14).<sup>21</sup>

AKBh. mithyādṛṣṭyā alpaphalā aphalā vā: 「邪見によって実は少なく或いは無くなる」(254, 10-11).

Abhidharma-dīpa. mithyādṛṣṭyā bijād apakṛṣṭaphalā aphalā vā: 「邪見によって種子から劣悪な果実(が得られる)か果実が無い」(177.18).

勿論、この食い違いは KV だけを取り上げた場合それ自体では意味を持たない。何故なら、他の不善業道の結果も有部系のテキストと一致しているわけではなく、その対応が乱れており、単に文献によって異なっていることを示しているようにも見えるからである。しかし、KV の対応漢訳の説く十不善業道による外法の悪化の内容が総じて有部系資料に一致する傾向にあり、今問題にしている第九・十の不善業道の結果に関しては有部系資料と同一であること（第九はそれぞれ「令諸樹木果實

<sup>20</sup> Cf. 真谛译『俱舍释论』「由瞋恚故。一切所生皆悉萎苦。」(T 1559, 29, 245b29-c1).

<sup>21</sup> Cf. 真谛译『俱舍释论』「由邪见故。一切资生或少果或无果。」(T 1559, 29, 245c1).

苦澁」・「果味辛辣容貌醜惡」、第十は「苗稼不實。收穫尠少」・「外色不潔果實虛耗」)<sup>22</sup>、チベット訳は全て共通していて、漢訳資料と同様に第九では果実が「辛くなる(tsha ba)・苦くなる(kha ba)」とされ、第十では果実が「無くなる(med pa)・少なくなる(chung ba)」等の内容となっていることを考え合わせると、KV の異質性が浮かび上がってくる。有部系資料とほぼ一致する対応漢訳があるにも拘わらず、KV だけがこのような違いを示しているということはどうやら他と異なるように意図的に記述された可能性があり、しかもその作業には部派的な差異を反映した改変を意図していたことも疑われる<sup>23</sup>。では、その差異がどこに由来するものなのか、その手がかりが邪見業道を説いた後で更に記述されている胡麻・砂糖黍・乳の三種についてそれらの抽出したものが失われていくという内容にあると思われる。

## 2.2 正量部所属文献との対応

胡麻・砂糖黍・乳を宇宙論の中で象徴的に取り上げることが正量部独自の思想であることを見出したのは岡野である。彼はネパール写本にのみ残る仏教カーヴィヤ文献 *Mahāsamvartanīkathā* (= MSK) が正量部のものであることを発見し、更にそこに説かれている内容がチベット訳『有為無為決擇』の中で引用される未知の文献（彼は「文献 X」と呼ぶ）と一致していることを見出した。それによって正量部の思想には他部派には見られない特異な宇宙論が含まれていたことが判明したわけである。その特異な宇宙論（或いは終末論）の中に、十不善業道によって外法（胡麻・砂糖黍・牛乳）の消失を説く部分があり、それが先に見た KV に近似していることを指摘した。

彼が見出した正量部文献 MSK と「文献 X」の内容と上掲 KV の一節との具体的な比較は岡野 2002a に譲るが<sup>24</sup>、両者の近親性を次の二点について指摘している(2002a: 227)：

- (1) MSK も KV も十不善業道によってもたらされる結果について「外法」という言葉を用い、邪見業道の業報として現れる「外法の悪化」として「胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失」を記述すること；
- (2) 邪見業道の結果として虚無論者・断滅論者・ローカーヤタ等の思想の出現と食物の悪化と「胡麻・砂糖黍・牛乳からの精髓」が獲得し難くなる（或いは出来なくなる）という三者を組み合わせていること。

そして、KV と Tib1 との所引文献比較によって並川が引き出した結論、即ち両者が同系の経典を引用しており、同一部派所伝であるという主張を受けて<sup>25</sup>、KV と Tib1

<sup>22</sup> Ch-5, 894b24-25; Ch-6. 899a29-b1; Ch-5, 894b25-27; Ch-6, 899b1-2.

<sup>23</sup> 尚、『増壹阿含經』卷第八「安般品之二」第五經(T 125, 2, 583a19b2)では邪見が悪報をもたらすことを「毒や苦みをもつ植物」を引き合いに出して説明する。これは邪見が元々邪なものであるからその結果もまた悪しきものとなること、それが毒・苦みは種子の時からそもそも含まれているのだということと同じであるという例えである。ここには邪見から直接に毒・苦みをもつ植物が現れることは説かれていない。ただ邪見と毒・苦みとが連想される関係にあるということが他文献で確認出来る。

<sup>24</sup> 岡野が指摘する対応箇所は MSK 4.2.1-4, 18 と文献 X §§ 127-30 である。岡野は前者のうち、4.2.3-5 と 18 を岡野 2002a: 220, 223 に和訳している。文献 Xの方は岡野 1998a: 161-160 にある。

が正量部に所属していた可能性を強く指摘する。

以上のような岡野の考察によって、現存し且つ所属の確定した正量部資料とパラレルになっている限り、我々としては、KV § 61 に付加された部分が正量部の伝承と密接なつながりを持つものであると結論するのが妥当である。但し、ここで留保しておかなければならないのは、この部分が KV と Tib1 のみに見られる箇所であること、そして明らかに後から付加されたものである点である。この部分の正量部文献への対応関係だけでは KV 全体を正量部所属とするわけにはいかない。並川によって提示された KV 正量部所属説はこの KV § 61 とは無関係に行われた引用文献研究の成果であり、その意味で我々は既に片手には正量部所属可能性を示す別ルートから得られた証拠も持っている。そして岡野による研究によって、また新たな証拠も手に入った。更に内容の検討によってそれが明らかに有部系資料とは異なり、「鸚鵡経類」の中でも KV 独自のものらしいことが確認出来た。もう少しこの節の中味を検討して、それ以上の証拠が出るかどうかを見ていこう。

### 2.3 付加のパターン

1.2 で検討したが、三種の食物の消失を説く部分は十不善業道全体をまとめる文の後に現れる。但し、そのような文脈は KV のみにあって、Tib1 では食物の消失を説いた後で全体をまとめる文が残されている。この部分が付加であるとすれば、チベット訳はきちんと整合性を持たせて挿入したことになる。一旦は関連する節全体を終わらせる文が存在することによって我々は胡麻等に関する部分が後からの挿入であったことを想定した。

実は、第61節と同様に一旦はその節を終わらせるような一文があるにも拘わらず、更に記述を進めるような事例がもう一箇所存在する。それはこの KV では他の節では全く見られないような、ほぼ挿話の全体を引用或いは言及することで最大にして最長の節となっている第32節である。この節は「外国に行くことによってもたらされる果報」(deśāntara-vipāka<sup>26</sup>)を説くが、この節のシノプシス(と言っても引用或いは言及文献が多いのであるが)を示そう。

§ 32 「他国で異熟する業」(Lévi 50.12-64.13; A26v.3-38v.2; B15v.1-6, 18r.1-21r.6).

a) Maitrāyājña の avadāna (Lévi 50.14-55.16; A26v.4-33r.2; B15v.1-6, 18r.1).

b) Śyāmajātaka への言及 (Lévi 55.17-19; A33r.2-3; B18r.1-2).

・ Dhanamjayasūtra における Śaradvatiputra の言葉引用 (Lévi 55.19-56.2; A33r.3-5; Bx).

・ Śīthālaka(Śivālaka)sūtra の引用 (Lévi 56.2-5; A33r.5-v.2; Bx).

c) Maitrāyājña-avadāna の続き (Lévi 56.7-8; A33v.2; Bx).

d) Ajātaśatru の地獄転生について言及 (Lévi 56.9-10; A33v.2-3; B18r.2).

e) Maitrāyājña の誓願についての言及 (Lévi 56.11-12; A33v.3-4; B18r.3).

・ Śyāmajātaka への言及 (Lévi 56.12-13; A33v.4-5; B18r.3).

f) Maitrāyājña の avadāna: 世尊による連結 (Lévi 56.14-57.3?; A33v.5-34r.4; B18r.3-6).

<sup>25</sup> 岡野 2002a: 228-229 参照。彼は並川 1984a を援用しているが、KV と Tib1 との同系関係の指摘については並川 1984c: 39 に詳しい。

<sup>26</sup> 両写本とも -vipāka ではなく -vipakṣa と読んでいる。

この最後に通常、節終わりにくる「以上が、. . . という果報を生む業である」という文が両写本ともある。

**A34r.4: idaṃ krama deśāntaravipakṣaṃ || B18r.6: idaṃ karma deśāntaravipakṣaṃ ||**

g) etad darśayati Bhagavān (Lévi 57.5-58.2; A34r.4-v.5; B18r.6-v.6).

両親と和尚・阿闍梨への供養が等しいこと (Lévi 57.5-18; A34r.4-v.4; B18r.6-v.4).

・ Śrāvastī の貧しき者のアヴァダーナ。二つの gāthā を引用 (第二のものは Dhṛ.).

・ Tagaraśikhin への豆汁の供養 (Lévi 57.18-58.2; A34v.4-5; B18v.4-6).

h) Maitrāyājña の解脱の種子 (Lévi 58.3-6; A35r.1-2; B18v.6-19r.1).

i) 世尊と両親に背くことの結果について (Lévi 58.7-11; A35r.2-4; B19r.1-3).

・ Devadatta が Avici 地獄に落ちた話 (Lévi 58.8-9; A35r.2-3; B19r.1-2).

・ Rauruka 都城の Śikhāṇḍī への言及 (Lévi 58.9-11; A35r.3-4; B19r.2-3).

j) 両親と和尚・阿闍梨への供養による果報の差 (Lévi 58.12-64.13; A35r.4-38v.2; B19r.3-21r.6).

・ 世尊は悟りへの道を知る；両親は知らない (Lévi 58.12-16; A35r.5-v.1; B19r.3-5).

・ 両親を殺すことの不正について (Lévi 58.126-59.3; A35v.1-3; B19r.5-6).

・ 両親に許可なく出家することの禁止 (Lévi 59.3-10; A35v.3-36r.1; B19r.5-v.3).

世尊が出家して父・シュッドーダナが失明した話 (Lévi 59.10-11; A36r.1-2; B19v.2-3).

・ 両親が息子に望むこと (Lévi 59.11-18; A36r.2-5; B19v.3-5).

・ 律への言及 (Lévi 59.18-21; A36v.1-2; B19v.5-20r.1).

・ Cakravartistūtra からの引用 (Lévi 59.21-60.6; A36v.2-5; B20r.1-3).

七宝のうち象・馬宝の獲得について

・ Mahiśāsaka 派の律からの引用 (Lévi 60.8-15; A37r.1-4; B20r.3-6).

その中で Maitrāyājña への言及

・ yathā coktaṃ Bhagavatā sūtre (Lévi 60.15-61.5; A37r.4-v.1; B20r.6-v.2).

・ Dakṣiṇāvibhaṅgasūtra の引用 (Lévi 61.5-10; A37v.1-4; B20v.2-3).

・ 仏弟子の伝道活動について (Lévi 61.10-64.3; A37v.4-38r.3; B20v.3-21r.3).

Mahākātyāyana, Avanti (Lévi 61.10-11; A37v.4; B20v.3-4).

Madhyandina, Kāśmīrā (Lévi 61-11-62.3; A37v.4-38r.1; B20v.4-5).

Gavāmpati, Suvarṇabhūmi (Lévi 62.3-4; A38r.1; B20v.5-6).

Piṇḍolabharadvāja, Pūrvavideha (Lévi 62.4-63.1; Ax; B20v.6).

Mahendra, Siṃhaladvīpa (Lévi 63.1-2; A38r.1-2; B20v.6-21r.1).

Pūrṇa, Śūrpāraka (Lévi 63.2-64.3; A38r.2-3; B21r.1-2; D line 1-2).

・ まとめとしての和尚・阿闍梨の優位性 (Lévi 64.3-13; A38r.4; B21r.2-3).

etad darśayati Bhagavān に始まる引用文 (Lévi 64.6-10; A38r.4-5; B21r.3-21r.5).

ata evaṃ āha Bhagavān に始まる引用文 (Lévi 64.10-13; A38r.5-38v.2; B21r.5-6).

この後、写本Aは次の第33節に続くが、写本Bは再び “idaṃ karma deśāntaravipakṣaṃ || 11” という終わりの文を持ち、続いて第33節に入る。

上から分かるように、一旦は節をまとめておきながらかなりの数の他文献に言及している。節終わりの文より前にある業報説明では、両親に孝養を尽くすことを主眼とした話が言及されているとまとめることができる (勿論、a)からf)のサブセクションにも後からの挿入であると思しきものもある)。他方、その後半では両親のみならず、世尊そして和尚・阿闍梨に対する帰依の問題を持ち込み、特に後者の重要性

を説くことをより明確に謳っている。最も象徴的なのは、第32節末にある次のような一節である。

yataḥ Bhagavān parinirvṛ(taḥ | tada)ntare yaḥ kaścīd abhivinito bhikṣu(r) vā bhikṣuṇī vā upāsako vā upasikā vā sarve te bhikṣubhir eva vinitāḥ | yaś ca yenābhiprasāditaḥ tasyācāryopādhyāś ca | [Lévi 64.3-13; A38r.4; B21r.2-3]

「世尊は般涅槃された。その後では、四衆は誰であれ、僧衆によって導かれたのである。そして彼らを入信させたものが和尚・阿闍梨なのである」

この部分は写本Bのみに残るが（写本Aではおそらく行を飛ばして筆写したために起きた脱落であろうと思われる）、出家、在家にとってという立場を問わず出家教団の優位性（或いは絶対性）を述べた部分である。中でも「世尊は般涅槃された」という、極めて異例な言及によって、世尊に代わる教団の権威付けをしようとしていることは注目されてよい。このことは逆に見れば、出家主義に立つ教団組織の存続に強い危機意識を持っていたことの現れではないかと思われる。後半部分で言及される多くが「他国で異熟する業」と直接の関係を持たないのであるが、おそらく元々の主題である外国に両親の許可を得ずに出掛けたことによる果報（Maitrāyāñī のアヴァダーナ）を説くことからの連想で、和尚・阿闍梨に許可を得ず出掛けることの禁止、従って和尚・阿闍梨が如何に重要であるかを説く形で多くの文献を挿入したのであろう。そこには出家主義の崩壊とも言える事情があったのではないかと推測される。そうした意識が第32節後半の世尊、和尚・阿闍梨の優位性・重要性を殊更に強調する内容を組み込んでいったのではないか。

また、第32節後半に見られる仏弟子による伝道活動の記述にも注目したい<sup>27</sup>。西はアヴァンティ、北はカシュミール、東はプールヴァヴィデーハ、南はシンハラと、ほぼインド全域に活動した地方伝道の記述は、勿論許可無く他国へ赴いてなされたことではなく、主眼はあくまでそのような地方において改宗した人々にとっての和尚・阿闍梨の重要性を述べることにある。第32節の本来のテーマから外れるようなこの記述は先に見た「世尊は般涅槃された」云々という一節の直前にあることから、教団秩序への危機意識を反映しているようでもあり、更に想像を逞しくすれば出家主義の崩壊が局地的なものではなかったことを示唆しているようにも見える（尚、この部分はチベット訳には存在しない）<sup>28</sup>。

部派仏教としてその勢力をかなり後代まで保持していたものが有部と正量部であるとの指摘を考えると<sup>29</sup>、我々は上記のような教団秩序或いは出家主義への危機意識を思わせる記述が挿入されたことに特定部派（正量部？）による何らかの意図を感じざるを得ない。

さて、「一旦は節を終了しながら、更に記述が進む事例」二つが共に正量部との関係を予想させる結果となった。第61節の付加部分「胡麻・砂糖黍・牛乳から抽出

<sup>27</sup> KV のこの部分を取り上げた論文に次ぎがある、Cousin 2001: 163-64. それによると Sarvāstivādin の伝承を用いながら、Vibhajjavādin の仏弟子の伝道に関する伝承の或る部分を作り替えたものであるという(p. 164, 15-23). パーリ文献にも仏弟子の伝道を記録するものがあるが、その人物群は勿論異なる: *Mahāvamsa*, ch. 12; *Dīpavamsa*, ch. 8; *Thūpavamsa*, ch. 6.

される汁の消失を語る部分」が正量部独特の思想を反映しているものであり、どうやら後から追加された部分であること、KVでは邪見業道がもたらす「外法の悪化」としての結果は「苦く鹹いものが生じてくる」であったが、有部系資料では邪見ではなく瞋恚業道の結果に配当されていて、他方有部系資料では「果実が無くなるか少なくなる」と邪見業道の結果として示されていること（これはKVでは瞋恚業道の結果である）が分かった。これらを考え合わせると、岡野が正量部とKVとの近親性を指摘した第二点、即ち邪見と三種の食物について組み合わせる記述は偶然のものではなくKVにおいて実は意図的に為されたものと考えることが出来る。つまり、正量部独特の思想を打ち出す為に、第九と第十の不善業道でもたらされる果報を入れ替えて邪見と苦い果実の結びつきを明らかにし、更に邪な思想が広まることによって三種の食物の「精髓」が失われていくという内容を加えたという可能性が高くなる。このような推定が許されるならば、一部分ではあるがテキストが段階的に拡大されていく過程で、そのテキスト形成もしくは改変に何らかの形で正量部（或いはその思想を知っていた者）が関わっていたと言えることになる。

### 3. KV写本の読みによる再考

この追加された部分が正量部伝承を受けているとしても、テキスト校訂上、若干の問題が指摘できる。Lévi 刊本の当該部分の写本Aではこの付加部分の冒頭は“Abhidharme uktaḥ” とあり、写本Bでは貝葉自体が一部欠損しているものの“mahāsamva + + + +” とある（ここでの欠損文字数は推定されたものなので、必ずしも決定的であるとは言えないが、多くても4から5文字であろう。本稿第1節に提示したテキストでは写本Aにある uktaḥ の分の文字数を引いて3文字分の欠損と

<sup>28</sup> 写本Bのみに言及される Piṇḍola Bhāradvāja については興味深い研究がある：Ray 1994: 151-162 を見よ。彼に依れば、この仏弟子は非ヴィナヤ文献では優れた苦行僧として見なされていた。ところがヴィナヤ文献では彼のそうした立場は徐々に卑小化され、更に後代の注釈文献では僧院主義 (monasticism) の立場から非難の対象とされてしまう。(ibid.: 160-61: “In fact, settled monasticism appears to be incorporating the charismatic forest saint into its own story but revealing considerable ambivalence in the process. Forest saints may be assimilated, we seem to be told, provided that their lifestyles and values are clearly subordinated to those of classical monasticism. That the stories of both Piṇḍola and Upagupta reveal the same dynamic suggests that the pattern of accepting but criticizing and punishing the forest saint is not an isolated phenomenon but a more general hermeneutical strategy employed by settled monasticism.”)

我々の KV では仏弟子の他国伝道は決してネガティブな文脈で語られているわけではない。むしろ、改宗したのものにとっての和尚・阿闍梨の権威付けを意図している。そうすると、KV のこの記述（写本Bのみの記述であるが）は Piṇḍola の伝道能力に限っての復権であったのであろうか。この部分は写本Bが唯一有する、写本Aには存在しない部分であり、両写本の関係を見る上で非常に興味深いのであるが、Piṇḍola の扱いについては上記 Ray の考察を除いては、例えば部派的相違を示唆するような一次資料は未だ見出せていない。

<sup>29</sup> 並川 1985b: 770; 岡野 2002a: 231, note 11; 2003a: 102-3. 特に岡野は正量部所属可能性を指摘する一節の後注において KV § 62 に説かれる「四大仏跡巡礼による果報」を取り上げ、「中インドにある仏蹟地巡礼の功德を盛んに強調していることは、『中インドの主要仏蹟はほとんど正量部の独占的管理下にあった』と静谷正雄が指摘する（『小乗仏教の研究』、229頁）、正量部の主要仏蹟支配の歴史的事実と無関係ではないように思われる」と言う（2002a: 231, note 11）。

したが、この語が写本Bにあったと確定したわけではない。従って、後続し、現存する文章 *bhaviṣyati samaye ...* までの推定欠損文字数は5文字前後になる)。Lévi はチベット訳 (*rnam par 'jig pa'i che* 「或る特定の破壊の時代に」) に基づいて写本Bの読みを *mahāsaṃvartakalpe* と復元し、校訂テキストに入れてある<sup>30</sup>。

しかしこの Lévi のテキストは写本Bの欠損文字数に対応していない。そして両者の読みを比較した場合、写本Aでは「このような理由で<sup>31</sup>『アビダルマ』に説かれている。未来世において(次のように)なるであろう」となるのに対して、写本Bでは Lévi の復元を採用すれば「これが原因となって『マハーサンヴァルタ劫』という未来世においては」となる。一方は文献に未来世のことが説かれていることを語っているのに対して、他方は出来事の起こる特定の時代を示しているという食い違いも出てくる。

現時点では、読みを確認出来る写本は二本しかなく、その両者が異なった読みを与えており、どちらかを選択するに際して、チベット訳に対応させることが一部可能な読みを残している写本Bの読みを採用することに校訂上一定の合理性はある<sup>32</sup>。しかし写本Aの読みは単なる筆写ミスではありえず、明らかな異読として考慮すべきであると思う。この読みの違いは両写本の(もしあるとすれば)伝承の違いを反映したもののように思えるが、先に見たようにこの部分に部派的な差異が認められる以上、注意が必要である。勿論、部派に基づく伝承の違いと断定するには決定的に資料不足である。では、写本Aに見られる“*abhidharma-*”という語を如何に理解すべきか。

### 3.1 “*abhidharma*”という語について

KV には *Abhidharme* 云々と冠せられた文献の引用が複数回存在する。それらは既に並川によって論じられていて、その要旨は以下のようなものである(1984b, 1985a)。

この文献は異なった表記で4回引用されるが、それぞれAからCにラベル化して検討される<sup>33</sup>。

(A) § 70. 94.7-15: *yathā cōktam Abhidharme Cakravartisūtre. ...*

(A') § 32. 59.21-60.5: *yathā Cakravartisūtra uktam Bhagavatā. ...*

(B) § 76. 103.6-12: *yathoktam Abhidharme Cakravartisūtre. ...*

(C) § 75. 102.1-5: *yathā cōktam Abhidharme Cakravartisūtravibhaṅge.*

<sup>30</sup> Lévi 1932: 80, fn. 4: “Sans doute il faut rétablir *mahāsaṃvarta*, d'accord avec *T rnam par 'jig pa'i che* <au temps de la destruction spéciale>”.

<sup>31</sup> “*anena kāraṇena*”を「これが原因となって」と訳すことも可能であるが、「アビダルマにおいて説かれている」という文章の中では些か奇妙に聞こえる。

<sup>32</sup> 岡野 2002a: note 7 は自身が発見した正量部文献の名が *Mahāsaṃvatranīkathā* であること、そしてそこに見られる内容がこの KV の一節に対応していることから、この“*mahāsaṃva + + + +*”を復元した Lévi の読み“*mahāsaṃvartakalpe*”という語が MSK という名を連想させると言う(但し、Lévi 刊本の註にある写本Aの読みには言及していない)。

<sup>33</sup> 尚、こうした題名上の問題点は実は Lévi 自身が註に記録している(但し、誤った読みも含まれている [Lévi 1932: 59, fn.2])。§ 75 の引用例に関する註では、他の引用と比較して両写本の読みを結合させて“*Abhidharme Cakravartisūtravibhaṅga*”とする、としている (ibid.: 102, fn.1)。



これらの引用は全て転輪聖王の七宝についての記述である。まず、(A), (B) が多少の相違点はあるものの漢訳とチベット訳の『施設論』との比較から「同系の伝承」であることを明らかにし(1985a: 5)、(A) と (A') は内容は相似するものの、出典表記が異なることから、「元来異なった文献である」(ibid.: 7)可能性を指摘する。そして (C) は先に比較対照した他文献には対応していないこと、題名に *-vibhaṅga* とあることから (A), (B) の注釈文献であると考えられる。

以上の点から、Cakravartīsūtra の名を冠する引用文がその注釈文献とされるものを含めて「各々別個の3種の文献であること」を指摘し(ibid.: 7)、推定であると断りながらも、これらを (A'): Cakravartīsūtra → {(A)/(B)}: abhidharma Cakravartīsūtra → (C): abhidharma Cakravartīsūtravibhaṅga の順に展開したものとす。

そして“abhidharme”という語を伴う句を如何に理解するかについては、KVU の奥書部分に見られる “*tasmād api Mahākarmavibhaṅgaḥ. gotrāntariyānām Abhidharmasamyuktesu*” という文章との関連性から次のように解釈する：

「MKV の所属部派も MKV 自体を abhidharmasamyukta に収めてはいないものの、矢張り、この如き形式<sup>34</sup>を有していたのではないかと考えられるかもしれない。そうすれば、MKV 中に見られる abhidharme の用法とに関連性が見出せることになる。(中略) ここにおいて、abhidharme は abhidharmasamyukte と同一用法であると見做すことによって、その問題は解消されるのである。限られた少数の資料で論じる困難さは残るが、abhidharme とは abhidharmasamyukte の意味を有し、一種の蔵の如き形式を意味しているのではないかと考えたいのである」(ibid: 11)。

以上、並川の論述を簡略にまとめてみた。それによると、KV を伝承した部派には「増広、改変した経典」を収める蔵如きものがあり、そこに収められていた何種類かの Cakravartīsūtra が KV に引用されていることになる。従って、この解釈を付加部分に見られる写本Aの abhidharme という語にかりそめに当てはめるならば、「(KV を伝承した部派の) アビダルマにおいて」と理解できることになる。そこに述べられている内容が岡野の指摘通り正量部特有のものであるならば、まさしく KV は正量部所属であると言えることになる。

### 3.2 KV 写本間の相違

しかし、問題はそうは簡単ではない。KV における abhidharma という語の用例は全て Lévi 校訂本の読みに従って考察されているが、原写本によって上記の用例と他の abhidharma という語を含む箇所を見てみよう。

(A'): Cakravartīsūtra.

A36v.2: Cakravartīsūtre.

B20r.1: Cakravartīsūtre.

(A): Abhidharme Cakravartīsūtre.

A55r.4: Abhidharmma Cakravartīsūtre.

B32r.6: + + vartīsūtre<sup>35</sup>.

<sup>34</sup> 即ち「経蔵とは異なった、しかも教義書のみを蔵する論蔵とも異なった、或いは、相応せる一つの形式 abhidharmasamyukta が存在し」ていた可能性を想定している(1985a.: 10-11)。

<sup>35</sup> 写本はこの直前の語 *yathā cokaṃ* で5行目が終わり、6行目冒頭が欠けている。他の行の冒頭も同様に欠損していて、文字数は二文字である。

(B): Abhidharme Cakravartisūtre.

A59v.3: **Abhidha<ra>me** Cakravarttisūtre. B35r.2: Cakravarttisūtre vibhaṅge.

(C): Abhidharme Cakravartisūtravibhaṅge.

A58v.5: **Abhidharme** Cakravarttisūtre<sup>36</sup>. B34v.2: Cakravarttisūtre vibhaṅge.

KVU, Lévi 154-155; A62v.2: yathā uktaṃ Bhagavatā **Abhidharme** Bālakāṇḍasūtre |

KVU, colophon. Lévi 167.12-14; A77v.1-2: tasmād api mahākarmavibhaṅgaḥ | gotrāntariyānām **abhidharmakasa(m)yukteṣu** | mahāka(r)mmavibhaṅgo nānāḥ samāptaḥ ||

写本の読みを見ると、並川の分類では三種に分けられた Cakravartisūtra の題名の違いは実は Lévi による校訂の産物であることがはっきりする。写本Aは(A')の用例のみが Cakravartisūtra であって、他の三例は全て “Abhidharme Cakravartisūtre” であり、他方写本Bは(A')と(A)の用例が Cakravartisūtra で、(B) と (C)の用例は “Cakravartisūtre vibhaṅge” である。即ち、写本Aでは(A')のみが異なった文献名を有するが、他は全て同一名で引用されており、文献名によっては違いを明らかにすることが出来ない。また、写本Bに基づく限り、同系とされた(A), (B)は異なる文献名を持ち、「元来異なった文献である」とされた(A) と (A')は同一の名を持ち、更に本体と注釈の関係にあるとされた(B), (C)が同じ °vibhaṅga であることになる。両写本が同一の出典名を以て引用を行っているのは (A') の場合だけである。

文献名のばらつきをより細かく見ていくと、更に興味深い事実も出てくる。abhidharma- という語を用いているのは写本Aだけなのである。写本Bでは対応箇所にも一つも abhidharma という語を持たないばかりか、より正確に言えば、この写本には abhidharma という語は全く現れない。KVU は写本Aのみが伝えるテキストであるから、ここでの用例もまた写本Aの限定のものである。そして abhidharmakasamyukta という表現が現れるのも写本Aの奥書部分である。従って、文献について abhidharma- という表現を用いるのは写本Aだけの特徴であり、他方 vibhaṅga という語を付される文献名は写本Bのみにある。もしそれらの語のあるなしによって文献或いは伝承上の区別をしなければならぬとすれば、我々は二つの写本間にも引用文献同士にそうした区別があり得ることを念頭において置かねばならないことになる。

### 3.3 引用文献名の違い

一旦ここで視点を替えてみよう。二つの写本で引用する文献名が異なる事例はどれほどあるのか。写本AとBとを比較すると、同じ引用箇所でのその文献名が異なるケースというのは実は殆どない。その僅かな例は以下の三箇所である。

§ 1-c). Lévi 33.9-13; A12r.1-3; B7r.6-v.1.

A: yathā cokaṭṭaṃ Bhagavatā Vaisālyāṃ [sa]Kalikāsūtre

B: yathā cokaṭṭaṃ Bhagavatā Vaisālyāṃ Kā[ll]ikā ...

[経典名から推測すると Pāli AN, Kālakasutta; Ch. 『中阿含經』第94經「黒比丘經」に対応するようであるが、内容は合わない]

§ 2-a). Lévi 34.8; A12v.4-13v.3; B7v.5-6.

<sup>36</sup> Lévi はこの箇所での写本Aの読みを Abhidharmasūtra と注記しているが、誤りである (1932: 102, fn.1)。

A: tathā Śrāvakapratyekabrahmasūtram varṇṇayanti sma

B: yathā ca Pratyekabrahmasūtram varṇṇayanti

[Parallel: Pāli SN. Bakabrahmasutta; Ch. 『雜阿含經』第1195經「婆旬梵天經」；『別譯雜阿含經』第108經「婆迦梵經」<sup>37</sup>]

§ 32-j). Lévi 63.2-64.3; A38r.2-3; B21r.1-2; D<sup>38</sup> line 1.

A: yathā cĀdivarddhaśatake sūtram

B: yathā cĀddhyarddhaśatake sūtre\*

D: ... [cādivarddhasatake] sūtram

[Parallel: 見出せず]

§ 1-c) は対応文献が見当たらない。写本Aにある sa- はどうやら誤記であったと思われる。§ 2-a では対応経典から Bakabrahma- という人物名を経典名に含む文献を指していると考えられるが、両写本に含まれる pratyeka という語は内容的にもそれに相当するものがない。写本Aの śrāvaka- はおそらく {śrā}Baka- の誤記であろう。§ 32-j) の文献は全く分からない。いずれの例も引用・言及されている内容に両写本間で差異はない。

更に、両写本で出典表記が異なるものとして次の例がある。

§ 32-j). Lévi 60.15-61.5; A37r.4-v.1; B20r.6-v.2

A: yathā cokatam Bhagavatā sūtre |

B: yathā cokatam Bhagavatā ||

[Parallel: AN II.4; Ch. 『増一阿含經』第十一]

この例では写本Aのみが出典を「経典において」とするが、写本Bには sūtre という語が無い。内容に違いはない。

写本Aのみに存在する引用／言及文献は以下の二例である。それらは § 32-b) にあり、写本Bはこのサブセクションの最初の引用・言及を有しているものの写本Aにある二つの経典からの引用或いは言及を欠き、更に § 32-c) そのものを持たない。文章は § 32-b) の最初の引用・言及が終わって直ぐに § 32-d) に続いている。単なる欠落と考えると、およそ三行分に相当するので、誤写等の少ない写本としては受け入れにくい説明となる。しかし元々無かったものとするならば、両写本間に伝承上の違いを想定しなければならない。

Dhanamjayasūtre. § 32-b). Lévi 55.19-56.2; A33r.3-5; B missing.

A: yathā vajarājagrhe Dhanamjayasūtre.

Śīthālakasūtre. § 32-b). Lévi 56.2-5; A]33r.5-v.2; B missing.

A: yathā ca Śīthālakasūtre Bhagavatā uktam |

他方、写本Bのみに存在するという文献は見当たらない。記述の違いとして見出される限りでは以下のようなものだけである。

§ 32-j). Lévi 61.11-62.3; A37v.4-38r.1; B20v.4-5; Lévi 62.4-63.1; Ax; B20v.6.

前者は Madhyandinna (Majjhantika) によるカシュミール伝道について、写本Bは「そ

<sup>37</sup> 漢訳の経典名は、それぞれ経典に登場する中心人物から取ってある。共に Skt.=Pāli Bakabrahma に対応する。

<sup>38</sup> 写本Dについては工藤 2001 参照。

ここに精舎を建立し、今でもそこにある」との記述を有する。後者は仏弟子 Piṇḍolabharadvāja を挙げ、Pūrvavideha への伝道を記録する<sup>39</sup>。

以上、両写本に見られる出典表記の違いを見てきた。引用文献そのものの内容が異なる例は存在しないが、文献名については、決定的ではないにしろ、両写本で異なる例が一部存在した。どちらか一方のみが有する引用例に関しては、筆写者のレベルで生じた違いと理解できるものもあり、必ずしも伝承の違いと考える必要は今の所ない。言い換えれば、両写本に伝承の違いがなくても生じたであろう異読或いは欠落と考えられることができる。無論、写本間に伝承の違いが確認できるならば、この事例もその伝承の違いを反映したものと見なされるかもしれない。ただ、現時点では内容的に相違を明確に出来るほどのものがない。

従って、Cakravartisūtra 引用例のみが出典名について孤立した食い違いを示しており、偶々Aが或いはBが四箇所においてそのように異なって表記したと考えるには無理がある。やはりそこにはそれぞれの写本が持っていたであろう何らかの違いが残っているのではないだろうか。

### 3.4 伝承の違い？

Cakravartisūtra に関する並川の分類は単に経典名のみ相違から行われたものではなく、内容的に対応する文献との比較対照からなされたものであるから、こうした写本での文献名の異読が直ぐにその結論を否定するものでないことは確かである。しかし Lévi 校訂本での出典名の相違が、一部であるとは言え、対応関係あるいは文献の違いを結論する論拠となっているとすれば、そのような指摘は一旦は白紙に戻して考える必要が出てくる。出典名に関する限り、並川の論考と写本の読みとが真っ向から対立するからである。そして Lévi は Cakravartisūtra 関係の出典名を示すに際して基本的には写本Aに依っているが、(C) の用例だけは二写本の読みを混合して作られたものだからである。この「作られた」文献名は Lévi によれば、他文献との比較からなされたとのことであるが、それがどのようなものであったかについては全く記されていない<sup>40</sup>。我々はあらためて写本の読みに従った理解を試みてみよう。

(A) と (A') の引用例は、実際後者の内容が多少の語句の異同があるとは言え、ほぼ全て前者の引用文の中に含まれる。

§ 32-j). = (A').

*kasya karmaṇo vipākato rājā cakravartī hastiratnāny aśvaratnāni ca pratilabbate |*  
*dirgharātram rājā cakravartī mātaram vā pitaram vā vahati vā vāhayati [B: vāhāpayati]*  
*vā [B: pitaram vā svayam vā skandhe (vā vahati |)] hastyaśvarathādibhir vāhayati |*  
*ācāyopādhyāyān svayam vahati vā vāhayati vā | tasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī*  
*hastyaśvaratnāni pratilabbate |*

§ 70-a). = (A).

*katamasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī hastyaśvādīni vāhanāni pratilabbati [B:*

<sup>39</sup> 前注28参照のこと。

<sup>40</sup> 前注33参照のこと。

pratilabhate] | dirgharātram rājā cakravartī mātaram vā pitarām vā upādhyāyam vā skandena vahati vā vāhayati [B: vāhāpayati] vā | hastyaśvādibhiḥ śivikānair vahati vāhayati vā | durgasamkramam vā karoti | santārya eva vā [B: setubandham] karoti | upānahadānāni vā dadāti | kāruṇyena mahāṭavyām sārtham vā [B: sārthayāti°] atikrāmayati | tasya karmavipākena [B: karmaṇo vipākena] rājā cakravartī hastyaśvādīni pratilabbati | yatrārūḍhaḥ samudraparyantam pṛthivīm divasacaturbhāgena paryatati |

もし両者が同一文献名の下に引用されているならば、(A') が (A) からの抜粋引用であると結論することは容易い。内容的にはよく似ているからである。しかし、それらの出典名が異なっている場合には、伝承に違いを認める、即ち (A') から (A) への増広を想定し、伝承上異なった文献と考えるのも順当であろう。前者のケースが写本B、後者が写本Aのケースである。つまり、いずれの写本の読みを採用するかによって議論が変わってくる。更に、(A') は両写本とも同一の Cakravartisūtra という名の下に引用されているから、問題は写本Aの abhidharma という語の解釈次第となる。

引用例(A), (B)の間には、写本Bが vibhaṅga という語を有していて、他方写本Aは同一の文献とする。この場合、二つの写本がそれぞれ異なった典拠から文献を引用していると確認されるならば、写本Bの方を「vibhaṅga に引用されている Cakravartisūtra の一部分」が引用されたと考えることによって、同じ引用文であるのに出典名が異なることを解消できる。(B)-(C)間も、上記と同様の関係で理解することが出来る。

しかし、同じテキストの異なる写本が同じ箇所引用をそれぞれ別の典拠（別の文献名をもつもの）から引いてきたという想定が可能であろうか。前節で見たように、二つの写本が異なった文献名で引用を有する箇所は殆どないが、決してありえないわけではないことが確認されている。内容的には対応するにも拘わらず Pāli や漢訳とも文献名が異なるケースもあった。そうした事例を考えると、我々は二つの写本では同一の内容を持つが異なった名前知られていた（或いは異なった位置づけにある）文献がそれぞれが言及されていると推定しなければならない。勿論、両写本とも筆写の段階で個別に他文献を参照し、そこから文章を引用したわけではなかろう（もしそうであれば、我々の写本はテキストが拡大していく過程の証拠そのものになる。それはあり得ない）。つまり、特定の文献に関して二つの違った保持の仕方がされていた可能性がある。この可能性は写本Aだけが abhidharma という語を用いて文献を引用することでより高いものとなる。

3.1 で並川の考察に基づいて abhidharma という語が KV を保持していた部派に保持されていた「蔵」のようなものを指す可能性について見た。彼の指摘は複数の Cakravartisūtra が存在したであろうことを前提としたものではあるが、彼が言うように「部派仏教のサンスクリット文献中に、「アピダルマ経」なる用例が見出せるのは」KV と KVU だけであり、「その他の文献にはこのような用例を見出すことはできない」のであるから<sup>41</sup>、依然としてその指摘は有効である。写本Aのみがその語を用いているという事実は、そこに伝承という視点が否応なく持ち込まれることを示唆している。それ故、我々は写本間に何らかの伝承の差異を認めなければなら

<sup>41</sup> 並川 1985a: 2.

ない。

長々とこの問題を扱ってきたが、実は現時点で並川による結論、即ち順次展開した三種の Cakravartisūtra の存在を完全に肯定するなり否定するだけの論拠は持ち合わせていない。写本の読みを無批判に受け入れるわけではないが、一方の写本だけが特殊な語を用いていることと誤記とは判断出来ない形での読みを残していることを考慮すると、先ず写本の読みに従った解釈を提示する必要があると思う。写本間に伝承の違いを認めるとすれば、その限りにおいて、次のような説明をすることも出来る。即ち、それら全てが同一の文献からの引用であるが、伝承の異なる写本によって出典名が食い違っていて、他の漢訳やチベット文献との対応関係の相違は引用元の文献そのものが、おそらくは部派的な相違に基づいた違いを有していた為に生じたものである。いずれにせよ、サンスクリット本が存在しない資料からの引用である以上、引用元であるかどうかに関わらず、そのテキストの原文が回収されない状態では、可能性を指摘する以上の断定を避けたい。

この文献だけのことではないが、KV での全ての引用文献をパラレル文献と照合した限りでは、原文そのものを引用していると確認された例は、韻文を除くと、実は存在しない。確かに KV には引用であると示されているが、その中身が忠実な引用であるのか取意の引用であるのか、原文が存在しない限りどちらとも判断は出来ないのである。パラレルとなる文献の存在によって我々は KV の持つ多くの特徴を見出すことが出来る。しかし引用・言及内容がパラレル文献と相違していることの方が多いためである。直接の借用関係が確認できない限りは、おそらくは保持していた文献（そしてそこから引用され或いは言及された内容）が現存しているパラレル文献とは異なっていたと考えるしかない。

#### 4. まとめ

現在、入手可能な資料から導き出される結論は、それ自体仮説の域を出るものではない。A、B二写本を再読する中で得られた、両者の関係について、極めて消極的な推定ながら、現時点では二つの写本が異なったレベルにあったものと考えている。それは部派的な伝承の違いということではなく（その可能性も全くゼロではないが、その点を裏付ける他文献からの証拠はない）、むしろ伝承上の時期の違い（より特化して言えば、引用・言及文献が挿入され、更にそこに改変が施された時期の違い）に由来するものではないかということである。先に見た Cakravartisūtra の出典名の相違は、KV のテキストが徐々に改変されていく過程で生じたものと言えるかもしれない。写本Aには筆写年代が奥書に残されているが、それによるとネワール暦531年（西暦1410-11年）である。写本Bには奥書が残っていないので、年代がわからないが用いられている文字或いは数字からしてそれよりも古い時期の形が見出せる。勿論、両者にどちらかが他方を写したというような直接的な筆写上の関係はなかったであろう。

並川、岡野両博士による研究によって KV について、特にその所属部派について有力な説が立てられている。その証拠となった KV の一節をここで検討したが、正

量部への帰属が判明している資料とパラレルになっている部分が後からの付加であること、そして別の節で同様に付加された部分にも部派的な相違を窺わせる記述もあることが分かった。サンスクリット本『カルマ・ヴィバंगा』は拡大・展開していく過程で異なる部派によってその構成や内容を変えていったのではないかと考えている。テキストの元になる二写本にさえ、その違いをより詳細に検討すれば、伝承の違いを反映していると思われる箇所が見出せる。現在、写本研究の作業仮説として筆者が想定している「鸚鵡経類」発展の過程は以下のようなものである（各類に属する文献同士の関係は別に論じる）。繰り返すが、あくまでも作業仮説に過ぎない。KV 中の引用・言及文献と部派帰属の判明している、より広範な資料との照合が必要である。

#### 「鸚鵡経類」第一類

これらはパーリ・テキストと漢訳4本からなる。説かれる業報は14項目であった。おそらくは簡単な導入の話があったものと思われるが、それが次第に発展して現在見られるようなシュッカ・タウデーヤプトラの因縁譚へと変わっていった（Pali テキスト参照）。業報項目は次第に整備され、ある時期から各項目の業報をもたらず業の数が十種へと揃えられる。この点は中央アジア出土のヘルンレ・コレクションに含まれる二葉の『シュッカ・ストラ』断片で確認できる。この段階ではサンスクリット本 KV に見られるような他文献の引用は一切なかった。

#### 「鸚鵡経類」第二類

業報項目の増加と引用文献の挿入。項目の増加については、但し、順に加えられていったのではないが、少なくとも十不善業道を扱う節の前まで、そして第61節までがある段階で付加され、その後第62節以降が加えられたと思われる。この点は *uddeśa* の記述から確認できる。そして別途に他文献を引用することが行われる。或る程度の時期までに節の数が増やされ、その後引用文献が加えられたというように、構成上の前後関係を想定するのは写本Cの存在があるからである。この写本は第62節以降の後半部分を有しているが、一切他文献に言及せず、業報項目（というよりは布施の果報）だけを十種ずつ列挙していく。つまり、後半部分を持ちながら他文献の引用が存在しない『カルマ・ヴィバंगा』がかつてはあったのである。しかもこの写本は引用文献を多数有する KV とは業報項目の順序やその内容で異なっている。このことは引用を含む伝承と含まない伝承に分かれたことを意味し、含む方の伝承は順序・内容にかなりの改編を受けたものと想像される。写本Cのようなテキストから引用を含む伝承が出たとも考えることもできるが、写本Cが引用を含む写本Bと共に或る程度の期間伝承されていたことが分かっているので、二つの伝承は共存していたと考える。含まない方の伝承は写本Cであるが Tib3 も同系になる。漢訳二本と Tib2 も引用を含まないという点でこちらに属すると思われる。私はこの系統が KV より前の段階にあった（おそらくは有部系?）『カルマ・ヴィバंगा』ではないかと想定している。写本自体はネパール写本の断片しかないが、有部系が証明できる中央アジア写本が存在するのではないかと期待している。尚、コータン語或いはクチャ語等の中央アジア言語のテキストも引用を含まない伝承に

位置づけられる。

他方、引用を含む方の伝承は現在の KV である。かなりの意図的な改編を経ていて、おそらくこれが部派的な違いを反映したものになる。正量部の思想との密接な関係を示す一節を含んでおり、これを正量部版『カルマ・ヴィバング』と呼べるかもしれない。この系統には Tib1 が入る。部派による複数の伝承がいつの時点から存在したのか、引用を含むものとそうでないものがいつ頃分かれたかについては全く分からない。

## Bibliography and Abbreviations

### [Sanskrit Text]:

KV. (= MKV.) and KVU.: *Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karma-vibhaṅgopadeśa (Discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga), textes sanscrits rapportés du Nepal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pali en tibétan, en chinois et en kutchéen*, Sylvain Lévi, Paris, 1932.

*Abhidharmadīpa* with *Vibhāṣāprabhāvṛtti*, ed. by Padmanabh S. Jaini (Tibetan Sanskrit Works Series 4), Patna: K.P. Jayaswal Research Institute, 1977.

*AKBh.*: *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. ed. by P. Pradhan (Tibetan Sanskrit Works Series 8) Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

### [Catalogues of Tibetan Kanjur]:

L: London. Ulrich Pagel and Séan Gaffney, *Location List to the Texts in the Microfiche Edition of the Śel dkar (London) Manuscript bKa' 'gyur (Or. 6724)*—Compiled from the Microfiche Edition in conjunction with the Original Tibetan Manuscript, (Catalogus Codium Tibetanorum I), The British Library, 1996.

N: Narthang. 長島尚道「大正大学所蔵チベット大蔵経ナルタン版甘殊爾目録」『大正大学研究紀要』61, 1975, 760-726.

S: sTog Palace. T. Skorupski, *A Catalogue of the sTog Palace Kanjur*, (Bibliographia Philologica Buddhica Series Maior IV), Tōkyō, 1985.

F: Phug brag. Helmut Eimer, *Location List for the Texts in the Microfiche Edition of the Phug brag Kanjur — Compiled from the Microfiche Edition and Jampa Samten's Descriptive Catalogue*, (Bibliographia Philologica Buddhica Series Maior V), Tōkyō, 1993.

H: Lhasa. 高崎直道『東京大学所蔵ラサ版チベット大蔵経目録』東京大学文学部印度哲学印度文学研究室, 1965;

*The Brief Catalogues to the Narthang and the Lhasa Kanjur*. Compiled by the Members of Staff, Indo-Tibetan Section of the Indologisches Seminar, Universität Bonn, Issued on the Occasion of Professor Dr. Claus Vogel's Sixty-fifth Birthday, July 6, 1998, (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 40), Wien, 1998.

T: Tokyo (Kawaguchi MS). 齋藤光純「河口慧海師将来東洋文庫所蔵チベット大蔵経調査備忘」『大正大学研究紀要』63, 1977, 406-345.

Newark: Peter Skilling, "The Batang Manuscript Kanjur in the Newark Museum: A Preliminary Report," in: *ARIRAB* 4, 71-92;

Siglinde Dietz, "The 'Jig rten gzhag pa in the Kanjur Manuscript of the Newark: Appendix: Preliminary Basic Catalogue of Two Volumes from the Newark Kanjur," in: *The Many Canons of Tibetan Buddhism. PIATS 2000: Tibetan Studies: Proceedings of the Ninth Seminar of the International*



*Association for Tibetan Studies, Leiden 2000*. Eds. by Helmut Eimer and David Germano, Leiden; Boston; Köln: Brill, 2002, 13-28.

## [Studies]:

Barnett, L.D.

1931/32 “Index der Abteilung mDo des Handschriftlichen Kanjur im Britischen Museum (Or, 6724),” in: *Asia Major* vol. 7, 157-78.

Cousins, L.S.

2001 “On the Vibhajjavādins — The Mahimsāsaka, Dharmaguttaka, Kassapiya and Tambapaṇṇiya branches of the ancient Theriyas,” in: *Buddhist Studies Review* 18/2, 131-182.

Fukita, Takamichi (吹田隆道)

1990 “Sanskrit Fragments of the *Karmavibhaṅga* Corresponding to the Canonical Tibetan and Chinese Translations,” in: *Annual of Buddhist Studies [The Bukkyo Bunka Kenkyusho Nenpo]*, No. 7-8, 1-23.

Grinstead, E. D.

1967 “The Manuscript Kanjur in the British Museum,” in: *Asia Major*, New Edition Vol. 8, 48-70.

工藤 順之 KUDO Noriyuki

2001 「*Mahākarmavibhaṅga* A写本付随の部分筆写貝葉について」『香川孝雄博士古稀記念論集—佛教学浄土学研究』京都: 永田文昌堂, 95-103.

並川 孝儀 NAMIKAWA Takayoshi

1984a 「*Mahākarmavibhaṅga* 所引の経・律について」『佛教学研究紀要』68, 53-76.

1984b 「*Cakravartīsūtra* について」『印度學佛教學研究』32-2, 1069-1066.

1984c 「鸚鵡經の展開—特に *Mahākarmavibhaṅga* を中心として」『佛教学研究』14, 27-43.

1985a 「「アビダルマ経」考— *abhidharma cakravartīsūtra* の用例を中心として—」『佛教学大学院研究紀要』13, 1-16.

1985b 「*Mahākarmavibhaṅga* の所属部派について」『印度學佛教學研究』33-2, 773-769.

岡野 潔 OKANO Kiyoshi

1998 *Sarvarakṣitas Mahāsaṃvartanīkathā: Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāṃmitīya-Schule des Hīnayāna Buddhisms*. Tohoku-Indo-Tibetto-Kenkyūsho-Kankokai, Monograph Series I, Sendai: Seminar of Indology, Tohoku University.

1998a 「いかに世界ははじまったか—インド小乗仏教・正量部の伝える世界起源神話—」『文化』62-1/2, 176-158.

2000a 「初期仏教のコスモロジーと善悪」『日本仏教学会年報』65, 225-238.

2000b 「正量部の歴史的宇宙論における終末意識」『印度學佛教學研究』49-1, 406-402.

2002a 「正量部の伝承研究(1): 胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史」『櫻部建博士喜寿記念論集・初期仏教からアビダルマへ』京都: 平樂寺書店, 217-231.

2002b 「正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点」『印度學佛教學研究』51-1, 393-388.

2003a 「インド仏教正量部の終末観」『哲学年報』62, 81-111.

Ray, Reginald A.

1994 *Buddhist Saint in India. A Study in Buddhist Values and Orientations*. NY, Oxford: Oxford University Press.

Simon, W.

1970 “A Note on the Tibetan Version of the *Karmavibhaṅga* Preserved in the MS Kanjur of the British Museum,” in: *BSOAS* 33-1, 161-166.

山田龍城 YAMADA Ryūjō

1935 「鸚鵡經」『文化』2-3, 103-113.

**Appendix:**  
**Comparative Table of Sections of the Tibetan Kanjurs**

**Tib1:**

- D: Derge No. 338 (Taipei ed. vol. 15).  
 N: Narthang No. 323 (IASWR Microfiche. vol. 72, LMpj026.072, 22-24/25).  
 Q: Peking No. 1005 (TTP, vol. 39).  
 H: Lhasa No. 344 (vol. 72, mdo, la(26), [IASWR Microfiche, LMpj022.072]).

**Tib2:**

- D: Derge, No. 339 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhan*, (Taipei, vol. 15).  
 N: Narthang, No. 324 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhang bam po gcig* (Vol. 72, 464a6-481a6 [927-962]) [= IASWR Microfiche. LMpj022.072], 24-25/25].  
 Q: Peking, No. 1006 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhan*, TTP, vol. 39.  
 L: London Manuscript Kanjur, Or. 6724 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhan* (mDo, Chi, Vol. 36, 136b4-151a8) [= Microfiche 25D-27F/63, uin 3788-3790].  
 S: sTog Palace Kanjur, No. 298 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhang bam po gcig* (Vol. 87 [= IASWR Microfiche. LMpj014.308, 7-8/17]).  
 H: Lhasa, No. 345 *Las kyi rnam par 'gyur ba'i mdo bam po gcig dang sblau ka nyis brgya bdun cu pa* (vol. 72, mdo, la(26), 490b5-510a2 [IASWR Microfiche, LMpj022.072]).

**Tib3:**

- L: London Manuscript Kanjur, Or. 6724 (mDo, Ci, Vol. 35, [= Microfiche 52B-56C/68, uin. 3747-3751].  
 S: sTog Palace Kanjur No. 287, (Vol. 86, [= IASWR Microfiche, LMpj014.307, 15-16/20]).  
 F: Phug brag No. 186 \$870 (Vol. 71, Tsha, [= IASWR Microfiche, LMpj016.870, 25F-30A/25])  
 F2: Phug brag No. 404 \$896 (Vol. 97, Na, [= IASWR Microfiche, LMpj016.896, 56F-60D/64]).  
 N: Narthang No. 784 (783?) (vol. 102, 130a1-157b7 [= IASWR Microfiche. kha-skong, LMpj 020.000, 23-28/56]).  
 H: Lhasa No. 343 (vol. 72, mdo, la(26), [IASWR Microfiche, LMpj022.072]).

Skt	§ 51	§ 52	§ 53	§ 54	§ 55	§ 56	§ 57	§ 58	§ 59	§ 60	§ 61
D	582.4	582.4	582.5	582.6	582.7	583.1	583.2	583.3	583.4	583.5	583.6
N	454b5	454b7	454b7	455a2	455a3	455a4	455a5	455a6	455b1	455b2	455b3
Q	303a1	303a2	303a3	303a4	303a6	303a7	303a8	303b1	303b2	303b3	303b4
H	478b7	479a2	479a3	479a5	479a7	479b1	479b2	479b4	479b5	479b7	480a1
D	611.7	611.7	612.1	612.1	612.1	612.2	—	612.2	612.3	612.3	612.4
N	475a3	475a4	475a4	475a5	475a5	475a6	—	475a7	475a7	475b1	475b1
Q	318a7	318a7	318a7	318a8	318a8	318b1	—	318b1	318b2	318b2	318b3
L	146a6	146a7	146a7	146a8	146a8	146b1	—	146b2	146b3	146b3	146b3
S	318.2	318.2	318.3	318.3	318.4	318.4	—	318.5	318.6	318.6	318.7
H	503a2	503a2	503a3	503a3	503a4	503a5	—	503a6	503a7	503a7	503b1
L	315b1	315b1	315b2	315b3	315b4	315b4	315b5	315b6	315b7	315b7	315b8
S	748.7	749.1	749.1	749.2	749.3	749.3	749.4	749.5	749.6	749.6	749.7
F	173b1	173b1	173b2	173b2	173b3	173b4	173b5	173b6	173b6	173b7	173b8
F2	347a8	347a8	347b1	347b2	347b3	347b3	347b4	347b5	347b6	347b7	347b7
N	146b5	146b6	146b6	146b7	147a1	147a1	147a2	147a3	147a4	147a5	147a5
H	444a5	444a6	444a7	444a7	444b1	444b2	444b2	444b3	444b4	444b5	444b5

## Collated Text of Three Versions of the Tibetan Translations corresponding to the *Karmavibhaṅga* §§ 51-61

Here is a tentatively collated text of three versions of the Tibetan *Karmavibhaṅga* corresponding to §§ 51-61 of the Sanskrit *KV*. All discrepancies in the text, whether scribal errors or a variant reading, are noted; therefore the following text is not critically prepared. Since my study on the Tibetan *KV* is in progress and the relevant materials are not all yet collated, this text will be revised in near future in the form of a critical edition of the whole text.

Section numbers of Tib1 and Tib2 follow Lévi 1932 (see Tableau Comparatif, p. 16); numbers of Tib3 are given by me, which correspond to those of the Sanskrit *KV*.

### § 51 “Results of the ten evil courses of action appearing in the external things”

**Tib1, Lévi-LI:** (D582.4) mi (H479a1) dge ba'i las kyi lam bcu ste | bcu gang zhe na | (N454b6) lus kyi las rnam gsum dang |<sup>1</sup> ngag gi las rnam bzhi dang | yid (Q303a2) kyi las rnam gsum ste | (H479a2) mi dge ba'i las kyi lam bcu po 'di dag gi rnam par smin pas phyi rol gyi dngos po bcu rgud par (N454b7) 'gyur te |

**Tib2, Lévi-LII:** ji ltar mi dge ba (L146a7) bcu'i las byas pa'i rgyus |<sup>2</sup> phyi rol gyi yul sa rnam ngan du 'ong bar (N475a4) 'gyur<sup>3</sup> yin zhe na |

**Tib3, 051:** (F173b1) de la mi dge<sup>4</sup> bcu'i las kyi lam 'di (H444a6) dag<sup>5</sup> yang dag (N146b6) par blangs<sup>6</sup> pa'i rgyus |<sup>7</sup> phyi rol gyi dngos po bcu rgud par snang ba gang zhe na |

### § 52 “Results of killing living beings”

**Tib1, Lévi-LII:** srog gcod (D582.5) pa mi dge ba'i las kyi rnam par smin pa<sup>8</sup> (H479a3) sa'i mdangs dang (Q303a3) gzi byin nub par 'gyuro<sup>9</sup> || las de nyid kyi rnam par smin pas tshe thung bar 'gyuro<sup>10</sup> ||

**Tib2, Lévi-LIII:** srog bcad<sup>11</sup> (H503a2) na de'i (D612.1) lan gyi<sup>12</sup> sa'i mdog (S318.3) nyams par 'ongo<sup>13</sup> ||

**Tib3, 052:** (S749.1) srog (L315b2) gcod<sup>14</sup> pa'i (F2.147b1) rnam par smin pas ni |<sup>15</sup> sa'i mthu yong<sup>16</sup> (F173b2) su<sup>17</sup> nyams par 'gyur (H444a7) ro ||

### § 53 “Results of taking away people's things without their consent”

**Tib1, Lévi-LIII:** ma byin par len pa mi dge ba'i (N455a1) las kyi rnam par smin pas | (H479a4) sa la ser ba<sup>18</sup> bya dang<sup>19</sup> pa lang dang<sup>20</sup> byi la dang<sup>21</sup> srin bu<sup>22</sup> (Q303a4) la<sup>23</sup> (D582.6) sogs pa lo thog la za ba rnam 'byungo<sup>24</sup> || las de nyid kyi rnam par smin pa las<sup>25</sup> long<sup>26</sup> spyod (H479a5) 'khyan<sup>27</sup> (N455a2) par 'gyuro<sup>28</sup> ||

**Tib2, Lévi-LIV:** ma byin bar blangs na<sup>29</sup> (Q318a8) de'i las kyi<sup>30</sup> ser (L146a8) ba dang |<sup>31</sup> bye ba dang |<sup>32</sup> byi ba dang | srin mang du 'ong bar 'gyuro<sup>33</sup> ||

**Tib3, 053:** ma byin par len (N146b7) pa'i rnam par smin pas ni | ser<sup>34</sup> ba dang | byed<sup>35</sup> ba<sup>36</sup> dang | (S749.2) srid ba<sup>37</sup> dang | mu ge la sogs (F2.147b2; L315b3) pa 'byung<sup>38</sup> bar 'gyur ro ||

### § 54 “Results of sexual misconduct”

**Tib1, Lévi-LIV:** 'dod pa la log par g-yem pa mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas |<sup>39</sup> sa la rtswa (Q303a5) dri nga ba dang<sup>40</sup> nags tshal dri nga ba dag skye bar 'gyuro<sup>41</sup> (H479a6) || (D582.7) las de nyid kyi rnam par smin pas lo legs pa'i (N455a3) khyim na gnas pa'i rtog pa brjod pa |<sup>42</sup> kaśi rgyal po dga' bas lha 'ongs pa la |<sup>43</sup> nag po 'char ldan gyis (H479a7; Q303a6) tshe rabs snga<sup>44</sup> ma'i rtogs pa brjod pa smos pa rnam bya'o ||

- Tib2**, Lévi-LV: (N475a5) mi tshangs par (H503a4) spyod pa byas pas |<sup>45</sup> de'i las kyi khug rna (S318.4) dang | rlung dang |<sup>46</sup> rdul dang<sup>47</sup> rdul<sup>48</sup> chen po 'ong ba'i sar skye'o ||
- Tib3**, 054: 'dod pa la (F173b3) log par g-yem pa'i (H444b1) rnam par smin pas ni | mtsa'<sup>49</sup> dang | (N147a1) sa<sup>50</sup> 'bab pa dang | rdul dang | rlung dang | char drag<sup>51</sup> po 'byung (F2.147b3; 5749.3) bar 'gyur ro ||

### § 55 “Results of false speech”

- Tib1**, Lévi-LV: brjun<sup>52</sup> smra ba<sup>53</sup> mi dge ba'i las kyi rnam par<sup>54</sup> (N455a4) smin (D583.1) pas<sup>55</sup> kha na ba dang<sup>56</sup> lkog<sup>57</sup> ma na ba dang<sup>58</sup> kha mnam pa la (H479b1) sogs par 'gyuro<sup>59</sup> || las de nyid kyi rnam par (Q303a7) smin pas |<sup>60</sup> [par 'gyur<sup>61</sup>] mi bden pas bslus par 'gyur ba'o ||
- Tib2**, Lévi-LVI: brjun<sup>62</sup> mang du (D612.2) byas pa'i (L146b1) las kyi (Q318b1) 'bras bu ni<sup>63</sup> khar<sup>64</sup> mnam por (H503a5) 'gyur ba |<sup>65</sup> (N475a6) dbugs<sup>66</sup> mi<sup>67</sup> zhim par 'ong ngo ||
- Tib3**, 055: (L315b4) brjun<sup>68</sup> du smra ba'i rnam par smin pas (F173b4) ni |<sup>69</sup> dri mi zhem<sup>70</sup> par 'gyur ro ||

### § 56 “Results of being double-tongued”

- Tib1**, Lévi-LVI: phra ma zer ba'i mi dge ba'i las kyi rnam par (N455a5) smin pas |<sup>71</sup> sa la gseg (H479b2) ma dang<sup>72</sup> gyo mo la sogs pa (D583.2) reg na mi bde ba rnam 'byungo<sup>73</sup> || las de nyid kyi rnam (Q303a8) par smin pas |<sup>74</sup> g-yog 'khor dbyer rung bar 'gyuro<sup>75</sup> ||
- Tib2**, Lévi-LVII: phra ma mang du byas pa'i (S318.5) kyi 'bras bu ni |<sup>76</sup> yul mtho<sup>77</sup> dman<sup>78</sup> can dang |<sup>79</sup> lchang lcong<sup>80</sup> dang |<sup>81</sup> mi gtsang ba dang |<sup>82</sup> na rkong<sup>83</sup> (H503a6) dang |<sup>84</sup> (L146b2) rdo ba gram khrod can gyi yul du skye'o ||<sup>85</sup>
- Tib3**, 056: (H444b2) phra (N147a2) ma'i<sup>86</sup> rnam par smin pas ni |<sup>87</sup> mthon<sup>88</sup> dman<sup>89</sup> | dma<sup>90</sup> grogs<sup>91</sup> dang | 'dma (F2.147b4) rdzab dang | g-yangs<sup>92</sup> dang | (S749.4) ljag ljig<sup>93</sup> dang | (L315b5) ngan skyags<sup>94</sup> kyi (F173b5) ljan ljin<sup>95</sup> 'byung bar 'gyur ro ||

### § 57 “Results of abusive speech”

- Tib1**, Lévi-LVII: tshig rtsub po mi dge ba'i (H479b3) las kyi rnam par (N455a6) smin pas |<sup>96</sup> sa la rdul dang<sup>97</sup> nyal nyil gyi rlung ldang zhing char chen po la sogs pa 'babo<sup>98</sup> || las (Lévi205) de nyid kyi (D583.3) rnam (Q303b1) par smin pas |<sup>99</sup> yi<sup>100</sup> du mi<sup>101</sup> 'ong ba'i sgra (H479b4) thos ba na<sup>102</sup> yi<sup>103</sup> du mi 'ong ba mthong bar 'gyuro<sup>104</sup> ||
- Tib2**, Lévi-LVIII:
- Tib3**, 057: dga rtsub (H444b3; N147a3) pa'i<sup>105</sup> rnam par smin pas ni | 'bras bu ngan pa dang | (F2.147b5) reg du<sup>106</sup> mi bzod<sup>107</sup> ba<sup>108</sup> dang | gseg<sup>109</sup> ma dang<sup>110</sup> | gyo mo<sup>111</sup> dang | (S749.5; L315b6) tsher<sup>112</sup> ma tshang tshing (F173b6) dag<sup>113</sup> 'byung bar 'gyur ro ||

### § 58 “Results of ornate speech”

- Tib1**, Lévi-LVIII: tshig (N455a7) kyal par smra ba mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas | sa mtho<sup>114</sup> dman dang<sup>115</sup> sman ljongs dang |<sup>116</sup> ngam grog dang (H479b5) g-yangs (Q303b2) la sogs pa 'gyuro<sup>117</sup> || las de (D583.4) nyid kyi rnam par smin pas |<sup>118</sup> tshig mi btsun ba<sup>119</sup> (N455b1) 'gyuro<sup>120</sup> ||
- Tib2**, Lévi-LIX: (N475a7) kha khyal ba<sup>121</sup> (Q318b2) byas pa'i las (D612.3) kyi 'bras bu ni |<sup>122</sup> grog po (S318.6) mang pa<sup>123</sup> rtsi<sup>124</sup> shing dang |<sup>125</sup> yal ga dang |<sup>126</sup> 'dba<sup>127</sup> ['dab?] ma tsher ma can dang | (H503a7) nags tshang tshing can gyi yul du skye'o ||
- Tib3**, 058: tshig<sup>128</sup> kyal<sup>129</sup> ba'i<sup>130</sup> rnam par (H444b4; N147a4) smin pas ni |<sup>131</sup> rtsa<sup>132</sup> tshang tshang<sup>133</sup> dang | nags (F2.147b6) thibs po dang<sup>134</sup> | 'khri shing<sup>135</sup> tshar<sup>136</sup> ma<sup>137</sup> tshang

tshing can<sup>138</sup> dag<sup>139</sup> 'byung (L315b7) bar 'gyur ro ||

### § 59 “Results of greed”

**Tib1**, Lévi-LIX: chags sems mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas |<sup>140</sup> 'bras (H479b6) dang<sup>141</sup> nas dang<sup>142</sup> gro la sogs pa'i 'bras bu nyung zhing gra ma (Q303b3) dang<sup>143</sup> spu bu<sup>144</sup> la sogs pa'i skyon mang bar 'gyuro<sup>145</sup> || las de nyid kyi rnam par smin (D583.5; N455b2) pas |<sup>146</sup> longs spyod (H479b7) gzhan gyis khyer bar 'gyuro<sup>147</sup> ||

**Tib2**, Lévi-LX: (L146b3) brkam bar byed<sup>148</sup> pa'i 'bras (N475b1) bu ni |<sup>149</sup> 'bru 'bras<sup>150</sup> ci yang<sup>151</sup> phra mor<sup>152</sup> 'ong ngo ||

**Tib3**, 059: (S749.6) brnab<sup>153</sup> (F173b7) sems kyi<sup>154</sup> rnam par smin pas ni | lo<sup>155</sup> tog la<sup>156</sup> (H444b5; N1474a5) sogs<sup>157</sup> pa 'bras bu nyung du 'byung<sup>158</sup> bar (F2.147b7) 'gyur ro ||

### § 60 “Results of being malicious”

**Tib1**, Lévi-LX: gnod sems pa<sup>159</sup> mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas |<sup>160</sup> lo gtang<sup>161</sup> dang<sup>162</sup> 'bras (Q303b4) bu dang<sup>163</sup> sa bon tsha ba dang<sup>164</sup> kha ba 'byung bar 'gyuro<sup>165</sup> || (H480a1) las de nyid kyi rnam par (N455b3) smin pas |<sup>166</sup> mthong na mi sdug par 'gyuro<sup>167</sup> ||

**Tib2**, Lévi-LXI: khro ba (S318.7) byas pa'i lan gyis<sup>168</sup> |<sup>169</sup> sa bon 'bras (Q318b3) bu tsa ba dang | (H503b1) skyur ba dang |<sup>170</sup> kha bar 'ong ngo<sup>171</sup> ||

**Tib3**, 060: gnod sems kyi rnam par smin pas ni | 'bras bu dang | (F173b8) sa (L315b8) bon tsha ba dang | kha (S749.7) ba 'byung bar 'gyur ro ||

### § 61 “Results of false views”

**Tib1**, Lévi-LXI: (D583.6) log par lta ba mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas |<sup>172</sup> 'bras bu med pa (H480a2) dang<sup>173</sup> chung ba dang<sup>174</sup> (Q303b5) dug dang rku<sup>175</sup> ba la sogs pa 'byung bar 'gyuro<sup>176</sup> || las de nyid kyi rnam (N455b4) par smin pas | med par smra pa<sup>177</sup> dang<sup>178</sup> chad par lta zhing 'jig rten rgyad pan pa'i (H480a3) gtsug lag la sogs pa (D583.7) la dad par 'gyuro<sup>179</sup> ||

mi dge (Q303b6) ba'i las kyi lam 'di bcu<sup>180</sup> ji ltar bsgoms pa de lta de (N455b5) ltar rab tu 'phel bar 'gyur te | de'i phyir rnam par (H480a4) 'jig pa'i tshe | til yod kyang til mar mi 'byung<sup>181</sup> bu ram shing yod kyang bu ram mi 'byung | bu ram (Q303b7) yod kyang hwags dang<sup>182</sup> khar (D584.1) mi 'byung | ba<sup>183</sup> yod kyang 'o ma mi 'byung | (H480a5) 'o ma yod kyang mar mi 'byung |

de ltar mi dge ba bcu'i las kyi rnam par smin pas | phyi rol gyi dngos po rnam rgud par 'gyuro<sup>184</sup> ||

**Tib2**, Lévi-LXII: (D612.4) log par bltas<sup>185</sup> pa dang |<sup>186</sup> byed du bcug pa'i (L146b4) las kyi rgyus ni |<sup>187</sup> sa bon (N475b2) dang 'bras bu chung zhing ngan bar<sup>188</sup> (S319.1) 'ong ngo || 'di ltar mi dge ba bcu'i las byas (H503b2) pas |<sup>189</sup> phyi<sup>190</sup> rol gyi yul sa rnam ngan bar<sup>191</sup> 'gyur zhing (Q318b4) mi dge<sup>192</sup> ba'i gnasu<sup>193</sup> skye bar<sup>194</sup> 'gyuro<sup>195</sup> || bcom (L146b5) ldan 'das (N475b3) kyi yang<sup>196</sup> (S319.2) bka' stsal pa |

**Tib3**, 061: log par lta bar<sup>197</sup> (H444b6; N147a6) yang dag par blangs (F2.147b8) pa'i rgyus ni<sup>198</sup> |<sup>199</sup> 'bras bu<sup>200</sup> med pa dang |<sup>201</sup> nyung ba'i sa bon<sup>202</sup> 'byung bar (F174a1) 'gyur te<sup>203</sup> | mi dge ba bcu'i<sup>204</sup> las (L316a1) kyi lam<sup>205</sup> 'di dag<sup>206</sup> yang dag (S750.1) par blangs pa'i rgyus |<sup>207</sup> (H444b7) phyi (N147a7) rol gyi dngos po bcu rgud par snang ngo ||

- 1 D omits.  
 2 D, S: l; H, N, Q omit l.  
 3 D, L: 'gyur; H, N, S, Q: 'gyur ba.  
 4 F, F2, H add: ba.  
 5 F omits 'di dag; F2 omits: dag.  
 6 F2: slangs.  
 7 F2, S omit.  
 8 D, H, Q: pas.  
 9 D, H, Q: 'gyur ro.  
 10 D, H, Q: 'gyur ro.  
 11 D, L, S: bcad; H, N: gcad; Q: bcod.  
 12 L: lan gyi; D, S: lan gyis; H, N, Q: las kyis.  
 13 L: 'onggo; D, H, N, Q, S: 'ong ngo.  
 14 F2: bcod.  
 15 H omits.  
 16 H, N: yongs.  
 17 F2: yongsu.  
 18 D, Q add: dang; H adds: dang l.  
 19 H adds: l.  
 20 H adds: l.  
 21 H adds: l.  
 22 Q adds: dang.  
 23 Q: las.  
 24 D, H, Q: 'byung ngo.  
 25 Q: pas.  
 26 D, Q: i.  
 27 D, H: 'khyam; Q: 'khyams.  
 28 D, H, Q: 'gyur ro.  
 29 D, L, S: na; H, N, Q: pa.  
 30 D, L, S: lan gyis; H, N, Q: las kyis.  
 31 Q omits.  
 32 Q omits.  
 33 N: 'gyuro: D, L, Q, S: 'gyur ro.  
 34 F: sor.  
 35 F2, H, S: byi; N: bye.  
 36 F: pa.  
 37 F, F2: srin bu; H, N, S: srin.  
 38 F: <<'>>byung.  
 39 Q omits l  
 40 H adds: l.  
 41 D, H, Q: 'gyur ro.  
 42 D omits: l  
 43 D omits: l  
 44 Q: lnga.  
 45 D, L, S: l; H, N, Q omit: l.  
 46 L, S: l; D, N, Q omit: l.  
 47 H adds: l.  
 48 S, L omit: rdul dang.  
 49 F, H: mtsa <<'>>; F2: tsa ba; N: mtsa.  
 50 F2: ser.  
 51 F2: grag.  
 52 H: rjun.  
 53 D, H, Q: ba'i.  
 54 D, Q: mam par; N: mar.  
 55 H: pa la.  
 56 H adds: l.  
 57 Q: kog.  
 58 H adds: l.  
 59 D, H, Q: 'gyur ro.  
 60 D omits: l  
 61 Lévi reads; D, H, N, Q omit: par 'gyur.  
 62 H: rjun.  
 63 S adds: l.  
 64 H: kha.  
 65 H omits.  
 66 D, H, N, Q: dbugs; L, S: lbugs.  
 67 S: ma.  
 68 F, F2: rdzun.  
 69 F2 omits.  
 70 F, F2, H, N, S: zhim.  
 71 H omits.  
 72 H adds: l.  
 73 D, H, Q: 'byung ngo.  
 74 H, Q omit: l.  
 75 D, H, Q: 'gyur ro.  
 76 L: l; D, H, N, S, Q omit.  
 77 D, H, N, S: mtho; L, Q: mthon.  
 78 Q: sman.  
 79 Q omits.  
 80 D, H, N: lcong can; Q: long can; L, S: lcong.  
 81 Q omits.  
 82 Q omits.  
 83 S adds: pa.  
 84 Q omits.  
 85 N: l.  
 86 F: mo'i.  
 87 F omits.  
 88 F: thon; F2, H, S: mtho; N: mtho..  
 89 F, H, N, S add: dang; F2: dma' dang.  
 90 F: ngan; S: ngma (error for dma?).  
 91 F: 'gro; F2: 'grog; H, N, S: grog.  
 92 F, H, S: g-yang sa.  
 93 F, F2: lcag lcig.  
 94 F, H: skyugs; F2: skyes.  
 95 F2: adds: dang.  
 96 D, H, Q omit: l.  
 97 H adds: l.  
 98 D, H, Q: 'bab bo.  
 99 H omits.  
 100 D, H, Q: yid.  
 101 D, Q: du mi.  
 102 H: dang l  
 103 D, Q: yid.  
 104 D, H, Q: 'gyur ro.  
 105 F: po'i; F2: mo'i.  
 106 F, F2, H, N, S: tu.  
 107 F: brjod.  
 108 F2: pa.

- 109 F: *bseg*.  
 110 F2 omits: *dang l*.  
 111 F2: *mog*.  
 112 F: *tshe*.  
 113 F2 adds: *tu*.  
 114 Q: *mthon*.  
 115 D, H add: *l*.  
 116 H omits.  
 117 D, Q: 'gyur ro; H: 'byung ngo.  
 118 H omits.  
 119 D, Q: *bar*; H: *par*.  
 120 D, H, Q: 'gyur ro.  
 121 D, L, Q: *khyal ba*; H, N, S: 'khyal pa.  
 122 L, S: *l*; D, H, N, Q omit: *l*.  
 123 D, H add: *l*.  
 124 L: *brtsi*.  
 125 Q omits.  
 126 Q omits.  
 127 Q: *mdab?*  
 128 S: *tshig ba*.  
 129 F2: *khyal*.  
 130 F, F2, H, S: *pa'i*.  
 131 F2 omits.  
 132 F: *rtsa ba*; S: *rtswa?*  
 133 F2, H, N, S: *tshing*.  
 134 F2 omits.  
 135 F2 adds: *l*.  
 136 H, N, S: *tsher*.  
 137 F: *tshem* instead of 'kbrī shing tsbar ma.  
 138 F, F2 omit: *can*.  
 139 F2 adds: *tu*.  
 140 H omits.  
 141 D, H add: *l*.  
 142 D, H add: *l*.  
 143 H adds: *l*.  
 144 D, H, Q: *spun pa*.  
 145 D, H, Q: 'gyur ro.  
 146 H omits.  
 147 D, H, Q: 'gyur ro.  
 148 H, N: *byas*.  
 149 H, N, Q omit.  
 150 D, H, N, S, Q: 'brū 'bras; L: 'bras bu.  
 151 D, L, Q: *yang*; H, N, S: 'nga.  
 152 D, L, S: *mor*; N, Q: *mar*.  
 153 F: *brnabs*.  
 154 F2: *kyis*.  
 155 F: *log*.  
 156 F: *las*.  
 157 F: *stsogs*.  
 158 F2 omits: *du 'byung*.  
 159 D, H, Q omit: *pa*.  
 160 H omits.  
 161 D, H, Q: *tog*.  
 162 D, H add: *l*.  
 163 D, H, Q add: *l*.  
 164 D, H add: *l*.  
 165 D, H, Q: 'gyur ro.  
 166 H, Q omit: *l*.  
 167 D, H, Q: 'gyur ro.  
 168 H, N, Q: *las kyis*.  
 169 D, H, N, Q, S omit.  
 170 Q omits.  
 171 L: 'o ngo.  
 172 H omits.  
 173 H adds: *l*.  
 174 H adds: *l*.  
 175 Q: *dgu*.  
 176 D, H, Q: 'gyur ro.  
 177 D: *ba*.  
 178 H adds: *l*.  
 179 D, H, Q: 'gyur ro.  
 180 D, H add: *ji lta*.  
 181 H adds: *l*.  
 182 H adds: *l*.  
 183 Lévi omits: *ba*.  
 184 D, H, Q: 'gyur ro.  
 185 D, L, S: *bltas*; H, N, Q: *ltas*.  
 186 Q omits.  
 187 D, H, N, Q omit.  
 188 N, S: *par*.  
 189 D, H, N, Q, S omit.  
 190 L, S: *pha*.  
 191 H, N, S: *par*.  
 192 H, N, S: *bde*.  
 193 D, H, S: *gnas su*; L, N, Q: *gnas*.  
 194 Q: *par*.  
 195 D, H, Q, S: 'gyur ro.  
 196 Q omits: *yang*.  
 197 F, F2, H, S: *ba*.  
 198 F: *phyi rol ni* for *ni*; F2: *rgyur l phyis*.  
 199 F, F2, H omit.  
 200 F adds: *nyid du*.  
 201 S omits.  
 202 F2: *sar* instead of *sa bon*.  
 203 F2: 'gyur ro.  
 204 F: *bcu po'i* for *bcu'i*; F2: «bcu»'i po.  
 205 F2 omits: *las kyī lam*.  
 206 F, F2 omit: *dag*.  
 207 S, F omit.